



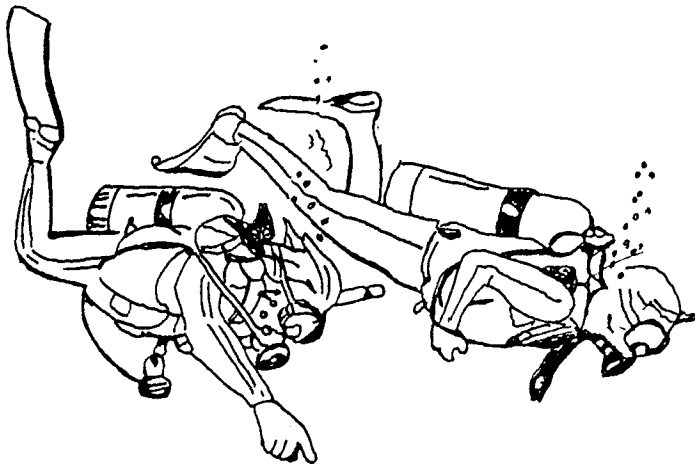
北スラウェシ 日本人会  
NORTH SULAWESI JAPAN CLUB

日本人会会報

# タルシウス

TARSIUS

第2号



- 1998年10月 -



北スラウェシ州日本人会

《 会報 タルシウス 第2号 》



目 次

- |                              |                             |         |       |    |
|------------------------------|-----------------------------|---------|-------|----|
| ◇ 御挨拶                        | 日本人会名誉会長<br>在グジュンパダン 日本総領事館 | 松田総領事   | ..... | 2  |
| ◇ メナド空港拡張工事                  |                             | 西村 計一   | ..... | 4  |
| ◇ ミナハサと沖縄                    |                             | 長崎 節夫   | ..... | 9  |
| ◇ インドネシアに行った感想は              |                             | 川口智香子   | ..... | 12 |
| ◇ マナド随筆(2) バットマン             |                             | 川井 雄二   | ..... | 14 |
| ◇ マナドで知った人々の心                |                             | 福岡 良男   | ..... | 15 |
| ◇ ジェネポント県視察メモ                |                             | 松井 和久   | ..... | 22 |
| ◇ 南の島の知性                     |                             | 宮内 泰介   | ..... | 24 |
| ◇ ミナハサ観光案内(2)                |                             | 川井 雄二   | ..... | 25 |
| ◇ 海外安全マニュアル —— 交通事故発生時における対応 |                             |         | ..... | 27 |
| ◇ 海外生活健康マニュアル                |                             |         | ..... | 31 |
| ◇ 総領事館からのお知らせ 年内主要日程         |                             |         | ..... | 32 |
| ◇ 北スラウェシ州 国立博物館              |                             | 川井 雄二   | ..... | 33 |
| ◇ インドネシア語クロスワードパズル           |                             | 川井 雄二   | ..... | 38 |
| ◇ 編集後記                       |                             | 日本人会編集部 | ..... | 39 |
| ◇ 北スラウェシ州日本人会 名簿             |                             |         | ..... | 40 |

## 御挨拶

此の度、前田会長及び川口副会長のお世話を頂きまして、7月9日から11日まで北スラウエシ州に公式訪問を行うことが出来ました。そしてこの機会に、北スラウエシ州日本人会が正式に発足、その第1回総会が開かれることになり、幸運にもこの記念すべき行事に出席することができ、殆どの会員の皆様とお会いできましたことは、私にとりまして誠に意義深いことでありました。

日本人会の存在は、大変大きな意味が有ると考えられます。当地北スラウエシ州の在留邦人の方々が連絡をとる場合においても、また、何か行事を行う際においても、日本人会という拠り所が有ると無いでは大変な違いが有ると思います。

日本人会そのものとしては会員間の親睦を深めることが最大の目的ですが、更に今後においては、当地地域社会との交流・親善を深めることが出来るようになりますし、また、当地政府当局、時には我が国当局などともいろいろな共通の問題に対処するに当たり、或いは、いろいろな行事を行うに当たって邦人社会がまとまって日本人会として行動することが可能となり、これは日本人会の存在の大変なメリットであると思います。

空から見ると、サム・ラトウランギ空港に近付いたとき、山波の間に一面につくしののように椰子の木が生い茂っていた美しさが今も強く目に残っております。初めて北スラウエシ州に第一步を踏み入れたときの第一印象は、人々の表情がすこぶる温和で豊かさが感じられること、緑が多く、特に家並みと道が立派で、また清潔であるという点でした。また、当地は歴史的にも日本とは特に深い係わりのある所で、当地近郊には日本人墓

地、記念碑や我が国とのゆかりのある遺跡が数多く有ると窺っております。

このような背景を持っている当地北スラウェシ州におきまして、前田会長、川口副会長をはじめとして発起人の方々がその意義を認識されて準備を進められ、今回、日本人会の正式な発足を実現することとなりましたことは、誠に喜ばしいことと存じており、関係者の皆様に心より深く敬意を表したいと思いません。

此の度の訪問では前田会長、川口副会長の心のこもったご案内でピトウン、マナド、ブナケン等の視察をはじめ、各企業等の施設・工事現場を訪れることができ、当地で活躍しておられる方々の姿を実際に拝見することができましたが、これは今後総領事館の仕事を行う上で大変貴重な経験及び知識となりました。ここに、お会いしました関係の皆様に厚く御礼を申し上げます。

私としましては、今後、出来る限り当地を訪れ、日本人会の発展のため、また、当地北スラウェシ州との交流・友好関係促進のためできる限りの努力をして行きたいと思っておりますので、よろしくお願い申し上げます。

在ウジュンパンダン総領事

松田 勲

平成10年7月

# メナド空港拡張工事

鹿島 西村 計一

## 1. はじめに

皆様御存知の如く、サム・ラトゥランギ、メナド空港は、インドネシア国スラウェシ島北部に位置し、観光・商業都市メナドの表玄関である国際空港です。

本工事はこのメナド空港を、アジア開発銀行（ADB）からの借款により、拡張整備を行ない将来の発展に備えるものです。

工事は滑走路その他の土木工事及びターミナルビルを主とした建築工事から成り立っており、土木工事は我々 KAJIMA-TEGUH JOINT OPERATION が、建築工事はローカル同志の ADHI-MANGGALA JOINT OPERATIONが請け負っており、両工事間のコーディネーションも重要となります。

コンサルタントは、空港設計で実績の多いオランダの NETHERLAND AIRPORT CONSULTANT (NACO) で、オランダ人エンジニアと協力して工事を進めています。

オペレーション中の空港での工事であり、安全確保が最重要課題である為、コントロール・タワーと常に密接な連絡をとりあって空港運営に支障のない様子を配っております。

## 2. 工事概要

既存空港は2,500mの滑走路と横断タクシーウェイ（誘導路）及び、20,000m<sup>2</sup>のエプロン（駐機場）を有しているが、その拡張工事の主な内容は次の様なものである。【図-(1)参照】

### 〔土木工事〕

#### 【図-(1)参照】

滑走路の150m延長及び全面オーバーレイ  
平行・タクシーウェイ（平行誘導路）の新設  
エプロン・コンクリート舗装拡張（約 43,000m<sup>2</sup> に）  
土工事カット・アンド・フィル 約90万m<sup>3</sup>  
雨水排水工一式  
アスファルト舗装マーキング一式  
ライティング装置基礎  
敷地周辺フェンス設置

### 〔建築工事〕 【図-(2)(3)参照】

ニュー・ターミナル・ビル建設（延床面積12,000m<sup>2</sup>）  
ニュー・コントロール・タワー  
管理棟 消防設備棟  
既設ターミナル・ビルをカーゴ・ビルに改築  
パーキング・エリア周辺道路  
給排水施設 機械・電気関係工事

## 3. 空港工事と経済危機

当工事は1997年4月に着工し、工事の立上りは順調で、当初予定では土木工事は1998年11月に、建築工事は1999年11月に完成の予定でした。ところが、昨年夏からのアジア通貨危機がインドネシアにも波及し、通貨ルピアの急激な下落という入札、着工時点では全く予想もしなかった事態が発生しました。

この通貨下落は各コントラクターの資金繰りを行き詰まらせ、とても当初契約のまま工事続行は不可能な状況となってしまいました。

この為我々コントラクターは得意先である運輸省航空総局、コンサルタントとも各種対策を打合せ何とか工事中断を避けるべく関係者全員で方向を模索しているところであります。

考えられる対策として：

- (1) 輸入器材に対しては一部U Sドル支払いを考えてもらう。
- (2) ローカル・コストに対してもエスカレーションを検討してもらう。
- (3) 既に遅れている工期を妥当な時期に延長してもらう。

等のプロポーザルをまとめ、政府側で検討してもらっていますが、何分国家的経済危機の状況下で、政府内部の議論も紆余曲折を繰り返し、未だ結論に達してはおりません。

#### 4. その後の経緯

上記事情から、我々としては主に経済的理由から今までと同じスピードで工事を続けることは不可能であり、どうしてもかなりのスローダウンをせざるを得なくなっております。

しかしながら当工事の重要性は得意先である運輸省も十分認識しており、また、地元におけるプロジェクト推進の責任者である北スラウェシ州知事閣下も現状を非常に心配しておられ、トップ・プライオリティーをもって当工事の完成に協力を惜しまないと約束して下さっております。

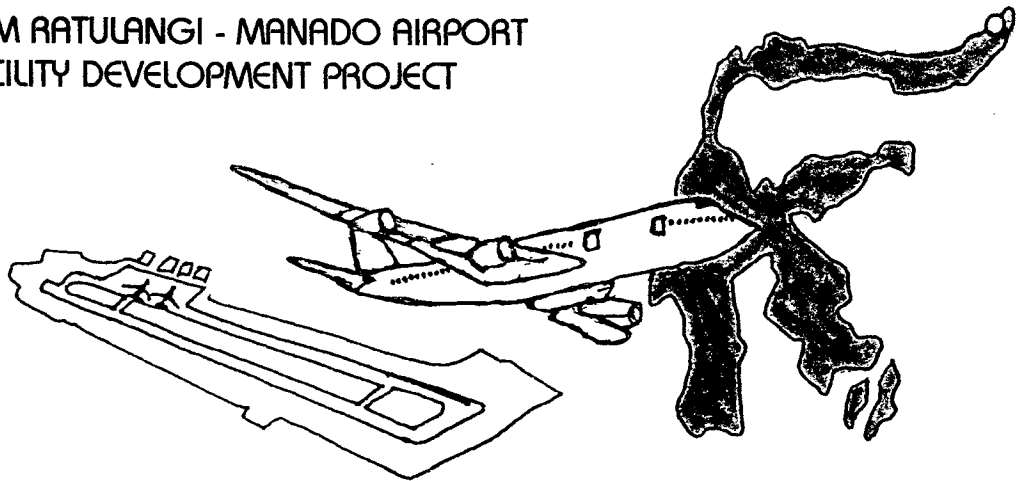
現在我々のプロポーザルは、ジャカルタの運輸省航空総局を経て、国家開発企画庁(BAPPENAS)、経済・財政・開発担当調整大臣(EKUWASBANG)執務室等の国家機関にて審議が続けられております。

#### 5. おわりに

既に当初予定工程からは大きく遅れておりますが、上に説明しましたプロセスが完了すれば、アスファルト材料を輸入し、滑走路、タクシーウェイの舗装工事を開始する等、再び工事のスピード・アップを計り、出来る限り早くプロジェクトの完成を目指すつもりでおります。  
しかしながら、現時点でゴーサインが出たとしても完成まで後約1年がかかると思われまますので、いましばらく皆様に御不便をおかけする事になりますが、何卒あたたかく見守ってやっていただきたいと思います。

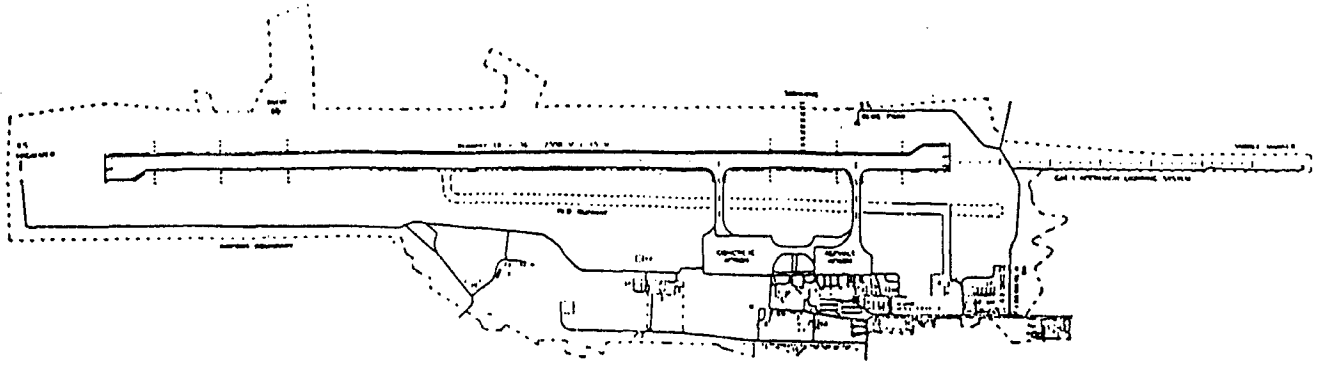
以上

SAM RATULANGI - MANADO AIRPORT  
FACILITY DEVELOPMENT PROJECT

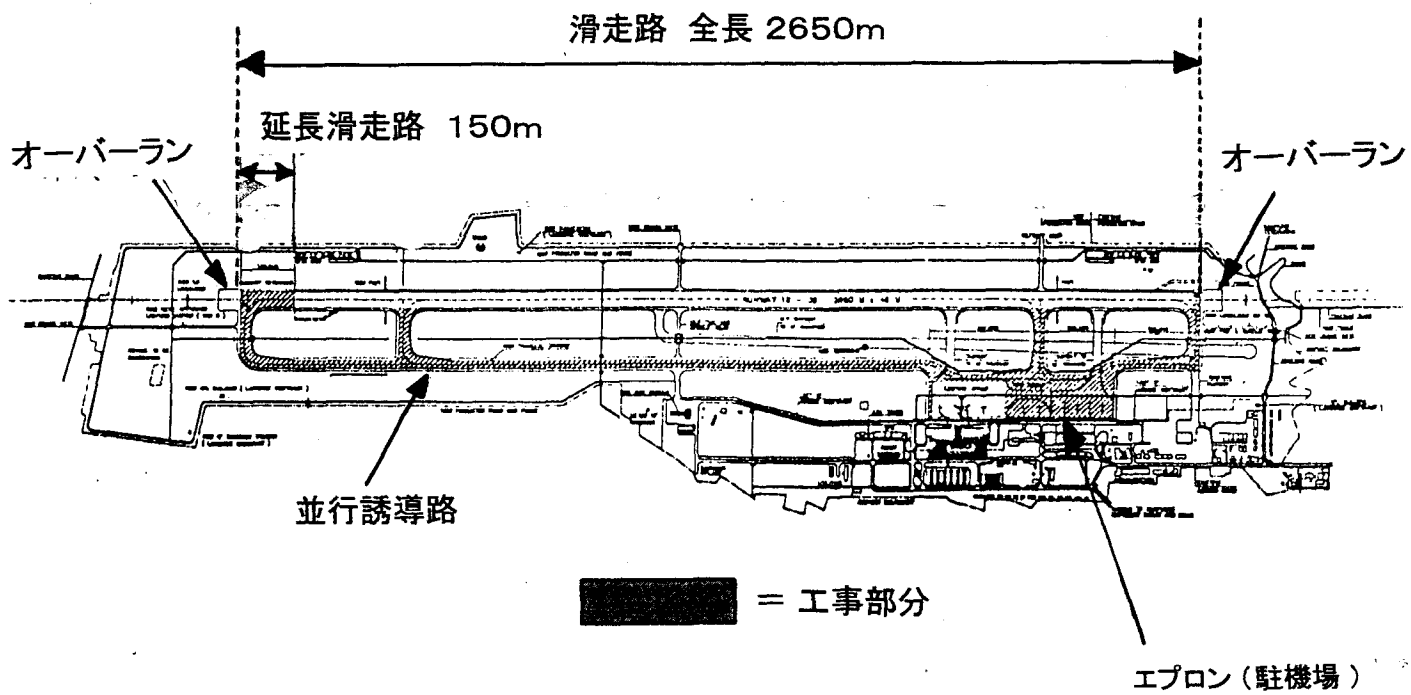


図(1) 既設空港平面図

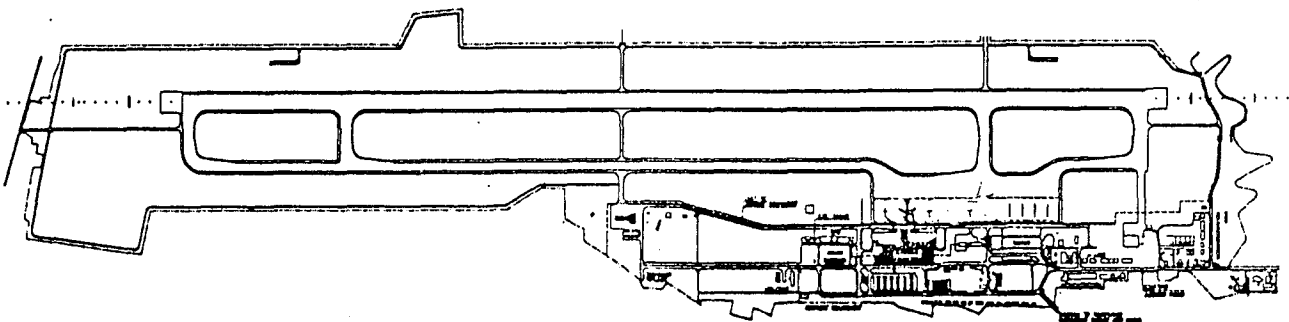
現状図

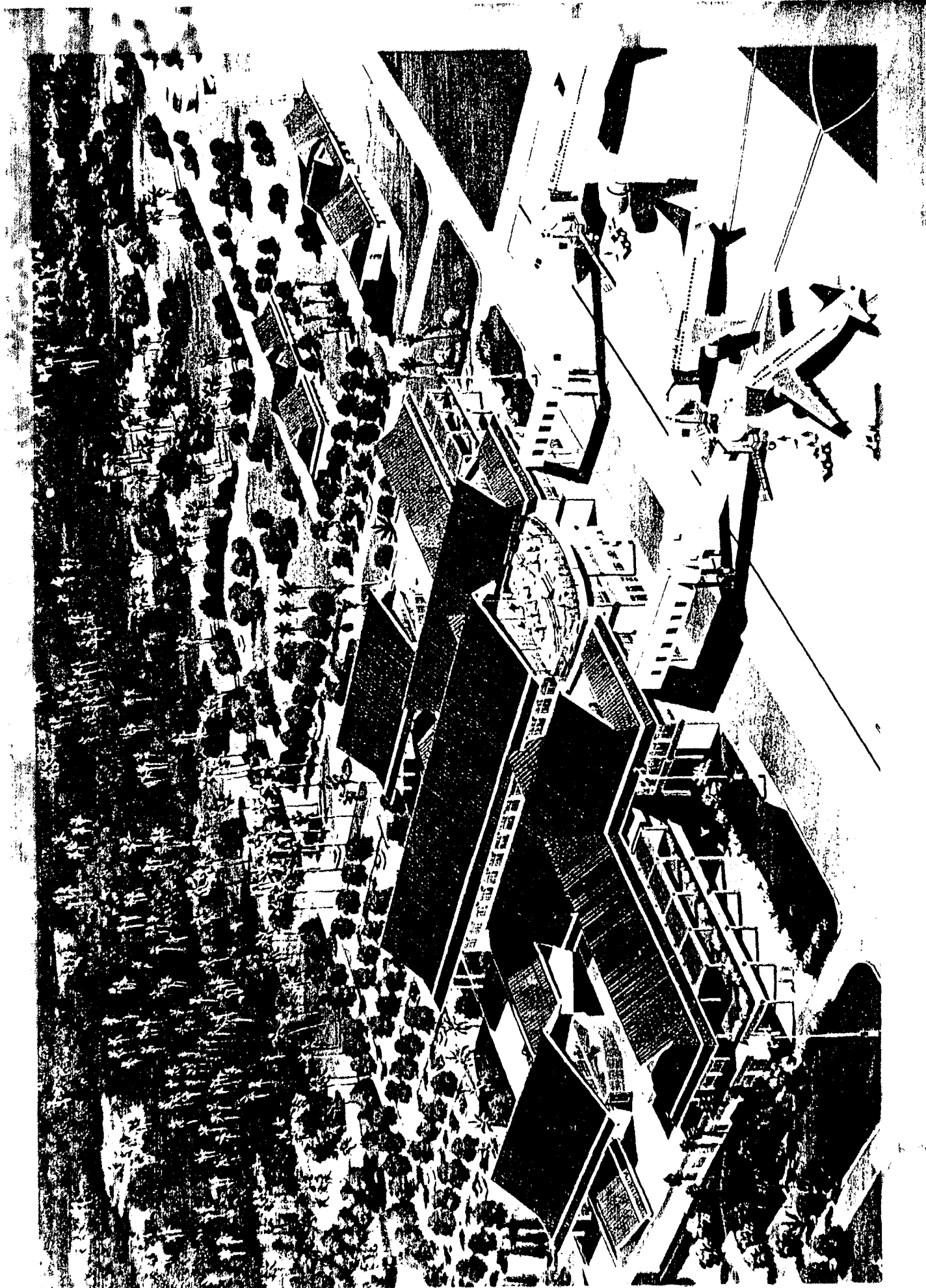


今回 工事部分



完成予想図









図(3) 設計コンセプト

ミナハサ様式をモチーフにしている。

## KONSEP ARSITEKTUR

### GEDUNG TERMINAL PENUMPANG

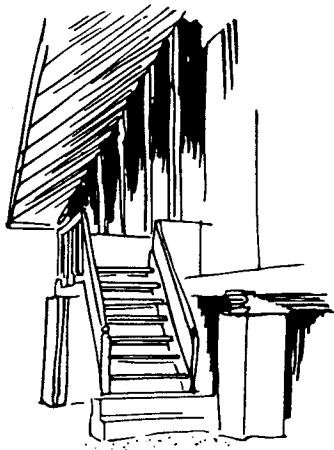
Gedung terminal penumpang yang baru, terletak dalam areal terminal yang sekarang, akan menunjukkan ciri khas bandara dengan arsitektur Minahasa yang disebut "wale Wangko".

Untuk menampilkan kekhususan suasana Sulawesi Utara yang dikenal sebagai "Kawanua", maka dalam perencanaan ruang akan memakai hiasan-hiasan (ornamen) dari daerah Gorontalo, Bolaang Mangandow, Sangihe dan Talaud.

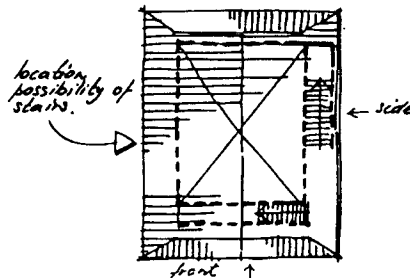
Pembangunan gedung sebagai "linear Type" dengan konsep

satu setengah lantai akan dapat menampung sekitar 675 penumpang dalam negeri dan 295 penumpang internasional pada jam sibuk selama pengembangan pertama.

Selain daerah kedatangan, keberangkatan dan pengoperasian lainnya, diterminal juga disediakan fasilitas kebutuhan umum seperti pertokoan, bank, daerah ucapan selamat (well - wishers) dan sebuah restoran dengan teras yang menghadap ke apron dan landasan.



*house with staircase along side wall.*



私が「セレベス島」の名を知ったのは30年以上も昔、まだ高校に在学中のことだったと思う。昭和30年代の前半、まだ200海里経済水域の概念が現われていない頃で、私の父や、先輩、友人達はその頃隆盛期にあった遠洋まぐろ漁業でセレベス海、バンダ海、チモール海などまで足を伸ばし、漁船にまぐろを満載して帰ってきていた。

彼等の日常の会話の中に、フィリピン群島やインドネシア方面の海域名、島名など頻繁にでてきたので、自然に覚えたのである。

昭和40年代に入ると、世界の各国が自国の沿岸海域に、外国漁船操業禁止の線を引き出した。200海里経済水域の出現である。

そして、沖縄のまぐろ漁船も頻繁にインドネシア海軍にダ捕されるようになった。漁船のダ捕事件があると、新聞、テレビで大きく報道される。マスコミの報道によって、漁船がダ捕され連行された港がアンボンやメナードであることを知った。メナードというのは今思えばビトゥン港のことであろう。

ダ捕がらみの話以外に、郷里の先輩、友人達が、かつお釣漁業でセレベス島に行ってきたということもあった。たしか、昭和40年代の終わり頃で、当時既に200海里経済水域の概念は定着していたから、これは現地との合併による事業だったと思う。そして漁業基地もビトゥンであっただろう。

時は移り、平成の御代も7年になってから、縁あって私もビトゥンにやってきた。港に係留中の海軍の艦艇を見て、昔、話に聞いていたメナード港とはこのことだったのか、と何となくなつかしい思いがした。また、ペリカニ社やギャラクシー社の船溜りに出入りするかつお釣漁船を見て、大昔、私が幼い頃の郷里の港の風景を思い出した。船のオモテ（船首）には釣台が突出し、胴の間の活魚艙にはイワシやキビナゴが泳ぎ、トモ（船尾）の炊事用の石油バーナー、あるいは薪を使う炊飯まで全く同じだ。まだ14、5才と見えるメシ炊きの少年まで沖縄人に見えてきた。

数日たつと、「私の父親は沖縄の漁師で、母はビトゥンの人」というのが現われた。また、昔、沖縄の漁師の奥さんであったという色白のおばあちゃんとその孫さんまで現われた。（おばあちゃんの彼氏は、太平洋戦争開戦直前にパラオ経由で沖縄に帰る途中、パラオで病没した。もう沖縄に到着したかと、便りを待っていた彼女の許に、パラオから病没の便りが届いた。今、彼女は、当時の在メナード領事発行の帰国証明書と、南洋庁長官発行の火葬証明を形見として大事に持っている）

「沖縄県人の2世、3世がまだいる。」というので、一体どれくらいいるのか、とリストアップを始めた。そのうちに20年ほど前に作られたという、ボロボロのタイプ打ち（ローマ字）の名簿まで現われた。

「墓もある」というので、ビトゥンとメナードで1ヵ所ずつの墓地に行ってみた。ビトゥンの墓地では、沖縄人の墓柱は十数柱あるうちのほとんどが土砂で埋まっていた。同行の2世、リョウジさんがスコップと現地の青年2人を連れてきて、ほぼ半日がかりで掘り出した。

メナードの墓地では最初、それらしい墓標が見つからずにモタモタしたが、近所のおばさんが「日本人の墓ならこのあたりだと思う。」と墓地の一角を教えてくれた。一面、草に覆われて墓標は見えなかった。これも近所の青年の助けを借りて、ナタで草をなぎ払い7柱見つけることができた。

7柱とも海軍軍属の肩書がついていて、終戦の年に没しているところを見ると、おそらく漁業の出稼ぎで来たのが、現地で徴用され戦災に遭ったものと思われる。(ビトゥン墓地のは、没年月もまちまちで、軍属の肩書などもなく、これらは戦災とは関係ないように思う。)

要するに、現地で結婚して子、孫をもうけた者、そうでなかった者など、かなりの数の沖縄漁民がミナハサ半島の先端(ビトゥンが中心)に住んでいたということだ。

私の郷里沖縄に、通称「アギヤー(又はアゲヤー)」と呼ばれる網漁法がある。追込網の一種である。日本の通常の追込網漁法と異なる点は、海中での網の設置や魚群の追い込み作業などが、人間の潜水によって行なわれることにある。暖かくて、珊瑚礁が発達している沖縄の海が生み出した漁法ともいえる。

主要な目的魚種は沖縄でグルクンと呼ばれるタカサゴの類で、それをアカムロとも言うことから、フィリピン群島などでは、この漁法を「ムロアミ」と日本式に称している。本式のアギヤー操業にはサバニと呼ばれる軽快な漁船(昔は無動力)が20~30隻の集団で行なった。1隻に7、8人~10人乗り込むので、かなりの労働集約型漁法である。

実際の操業では、魚群の探索から始まる。数名ないし10数名の探索要員が海に飛び込んで調査する。魚群—主にタカサゴ類—を確認したら、適当な場所に敷網と袖網を設置する。設置作業ももちろん潜水で行なわれ、網は海底に固定される形で張られる。網を張り終えたら、各船に1人、船を操る要員を残して全員がイルカになって魚群を敷網に追い込む。

追い込み作業に入る直前の陣型は、敷網が丁度、扇の要の位置にあり、敷網から両腕を広げたように斜め前方に袖網があり、扇のへりの部分に狩り手が適当な間隔で配置された形になる。扇のへりの部分は参加する人数によって広がり具合が違う。人数が多ければそれだけ広範囲の魚を追い集めることができるというわけだ。

普通、この扇のへりの部分は海の深みにあたり、要の敷網部分は浅い方にあるので、魚群を深みから追い上げるような格好になる。だから「上ゲヤー」と呼ばれるようになった。

とにかく、100名以上の人間がイルカになって、そこらあたりに泳いでいる魚全てを狩り立てるので捕獲能力が非常に高い。

しかし、漁業において捕獲能力が高いということは、両刃の剣である。たちまち資源量に問題が出てくる。特にこの漁法は人間が潜水して作業するという性格からして、漁場は島の周辺や珊瑚礁の周辺に限られる。

ひとつの漁場で獲りつくすと、次の漁場へと移る。獲ることだけでなく、販売も考えなければならない。消費力のある都市部にできるだけ近い場所で操業するのが有利である。

それやこれやで、沖縄のアギヤー・チームは徐々に県外にあふれ出して行った。北方へも行った。しかし、漁法の本質からして南方へ流れ出すのが自然である。フィリピン、マレー半島、シンガポール、ジャワ、ボルネオへ進出し、セレベス島までやってきた。

セレベスでは、当初はマカッサル(現ウジュン・パンダン)で始まったかもしれない。マカッサルで操業したチームがメナードに移動したのか、あるいは全く別のチームが例えばフィリピン方面から移動してきたのか、とにかく明治の末期にはメナード近辺で操業が始まった。

メナード近辺と言え、地形から見て、1ヵ所に何年も落ち着いて操業できるような場所はない。おそらく、ミナハサ半島の北部(バンカ島を含めて)を点々と移動しながらの操業であっただろう。(これは私の推測でしかないが)しかし、漁獲物の販路の中心はあくまでもメナードである。

このアギヤー漁業が大正期から昭和の始めにかけて漸次かつお釣漁業にかわっていった。

その頃、ミナハサ半島に接するセレベス海やマルク海はかつおの宝庫である。無尽蔵とも見えるかつおの大群を目のあたりにして黙っている手はないだろう。時期的にも明治末期から大正期は漁船の動力化、大型化など、日本のかつお釣技術の発展が目ざましい。

技術の発展と、第一次大戦による旧南洋群島の獲得などとも連動して、当時オランダ領のセレベス島、ミナハサ半島にも日本の漁民によるかつお釣漁業が始まった。漁業基地は立地条件からして、「ビトゥン」で決まりである。

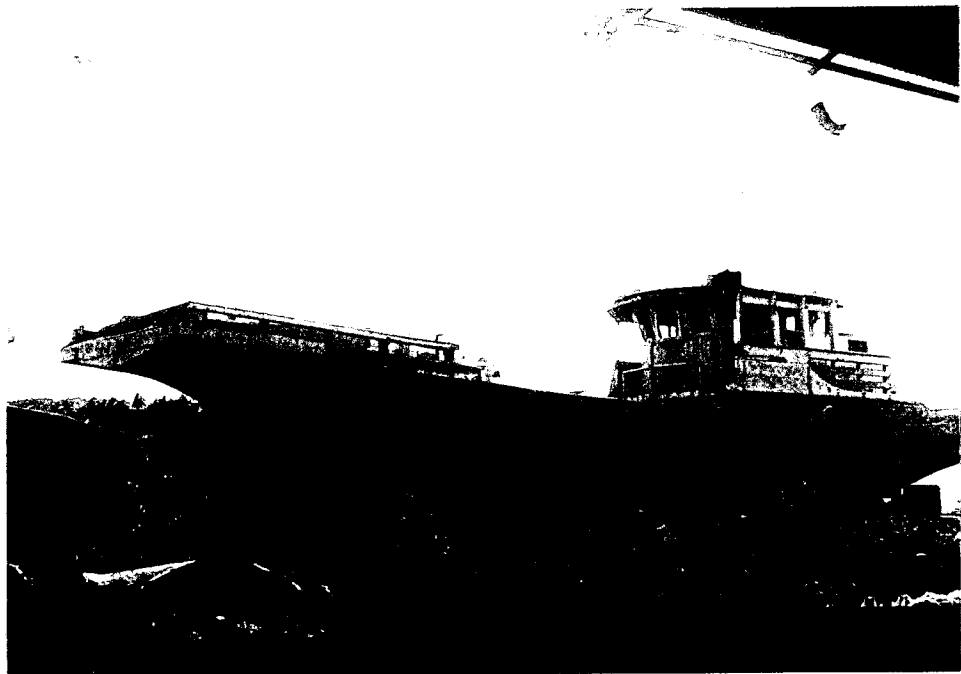
沖縄から、アギヤー漁業をするために出てきた漁民もビトゥンまで来て、かつお釣漁業へ「業種転換」と相成った。

太平洋戦争の勃発で、ミナハサ半島における沖縄漁民の活動は終止符を打った。だが、彼等のまいた種は残った。ビトゥンとその周辺地域には彼等の子孫が今なおその数を増やし、かつお一本釣漁業は、その技術を現地漁民に引き継がれて、ミナハサの主力産業としての地位を保っている。

私はこの文章を、セレベス航海中の船上で書いている。  
左舷はるかにサンギ島が見える。かつてはこのあたりの海も沖縄漁民の独壇場であったのだ。

「夏草や、つわものどもが夢のあと」をもじって一句。

「海風（インカディ）や、海人（ウミンチュ）どもが夢のあと」



上架中のかつお釣漁船

1996年4月 BITUNG

空港におりた途端、やられました。元来お愛想人間であるため、友人から通関キラーとよばれ、いつもフレンドリーにすり抜ける異国への第一関門なのにいー。いきなり別室ですよー、白い歯でにやにや笑うばかりの男に連れられて。問題にされたのは薬(白い粉だった、運悪く)と、中国留学を控えた私が持参した共産党がらみの本。と、多分私の厚化粧とど派手なワンピース。詰問されること30分。お金とられなくてよかったー、あなどれないインドネシア、と心してかからねば。と軽くひよこっと出かけてきた自分への反省で身が引き締まったものです……

が、しかし、一步外に出た途端、です。こんなことを言ったら申し訳ないですが、何処からともなくやってくるもあ一つとした空気と、わけもなくにやにやしてる人々のせいで、私は思わずつま先まで力が抜けてしまいました……脱力感。これって時差ぼけ?(あるのか?1時間の時差で)とも一瞬考えたけれど、結局私は着いたその日だけじゃなくずーっとこの脱力感を引きづって気づいたら1カ月たってしまったのです。

そう、なーんもしなかった。だって、なんにもしてないんだもん、ここの人みんな。いやいや、してるんだけど、日本人に比べたら、の問題です。当時、私と言ったら日本の某企業において馬車馬のように働かされてきたあとだったから、インドネシアの人たちのノー天気モードが妙に気に入ってました。精神的豊かさここにあり、とか何とかいって。日本にいたら情報の洪水で、1分1秒単位でその選択を無意識に迫られるような切迫感からの何ともいえない解放感もそれを増長してたのに違いありません。

加えて、青い空、深い緑、周りには海。もぐれば魚もいっぱい泳いでる。豊富な食材と様々なフルーツ。私の大好きなマンゴーも、ドリアンもマンゴスチンもなーんでもある。おまけに物価は安い、どーだざまーみろ、日本人。とか毎日叫んでいました。恥ずかしながら。

ただ一つ、私の悩み。それは、やたらに眠いということです。これは私だけでしょうか?皆さん、眠くはありませんか?頭がぼーっと微熱でもある感じがずーっとつづくんです……

と、ここまでが多分旅行者の視点というやつですね。

今までこの国にお邪魔させてもらったのが2回。延べ3か月です。のんきな私も、ここで仕事をする父も含めた日本の方々は、もしかしてとつても、とつても大変なのでは??とさすがに思っています。旅行でなら笑ってすむ異文化・価値観相違問題も、いったんビジネスに移れば、ある程度何かを押しつけざるをえない状況が発生するはずですから。そこでの精神的プレッシャーはいかほどのものだろうと。だって、あまりにも日本人とインドネシア人って違う風に見えるから。

もっと言えば、圧倒的に日本人が少ない都市での生活、家族から離れて暮らすストレスはどこで発散させるんだらう、と。

私が今まで会った海外で働く日本人は、みーんな頑張っていてそれぞれ素晴らしい方々でしたが、正直申し上げると時々肩に力が入り過ぎて、疲れきってる方々がいました……スラウェシで働く皆さんは、とつてもとつても自然ですね。そんな印象を受けました。現地の人

たちとのコミュニケーションはじめ、暮らし方や時間の使い方。無理し過ぎていないような気がします。もちろん、私がお会いしていない方々もたくさんいらっしゃるわけですが・・・ いつか、お会いできるのが楽しみです。

日本にいても、思い出すのはあの突き抜けるような青い空と、自堕落な自分のバカンスですが。ふとした瞬間によぎるのが、インドネシア人のあの笑顔ですね。にやっと言うか、にへっと言うか。あれで、すべてをよしとしてしまいそうで、ちょっと恐いです。でも、でもやっぱり魅力的ですね・・・

今度私が行くときも、彼らはまた笑って私を別室に連れてくるのでしょうか。はたまた、同じ笑顔で通してくれるのでしょうか。でも、何はともあれインドネシアは私にとってまだまだ謎ばかり。ぜひもう一度行きたい私です。また、馬車馬のように働かなくてははいけません・・・ 望むところです・・・ハイ。



1997年1月3日  
ブナケン島にて  
友人達とくつろぐ  
川口姉妹

この項における「バタック人」とはキリスト教徒のバタック人のことを、「マナド人」とはミナハサ人のことを意図します。

他の都市に比べてマナドには何故かバタック人が多いような気がする。税務署を始めとする官公庁にバタック人が多いのは普通のことだが、マナドでは一般のバタック人も非常によく見かける。電話帳を見ても、シナガ、シホンビン、シレガルなどの姓が多いのに気づくし、市内の商店にしても、TOKO HORAS、TOKO MEDAN、RM MEDAN などが目につく。堀内中佐の墓があるテーリン墓地では巨大なバタック族特有の墓に驚くことだろう。弊社だけでもマナド人と結婚してマナドに居住しているバタック人も数人いる。

このようにマナド人と結婚しマナドに定住しているバタック人は相当数いると思われる。これは一体どういう訳であろうか。

下記のようにマナド人とバタック人には共通点が多いのがその理由かもしれない。

- ①インドネシアでは珍しくファミリー・ネームを持っている。(家族制度)
- ②宗教/宗派が同じである。(信仰)
- ③ムスリムが忌み嫌う豚や犬を好んで食べる。(食生活)
- ④ジャカルタやジャワの外地では双方とも独特の立場にある。(社会的環境)
- ⑤高原と湖という風土が似ている。(地理的環境)

ミナハサの片田舎に行くと北スマトラのシアンタール/ブラスタギ地方と似通った景観を見かけることが度々ある。

一方、マナド人とバタック人のカップルはどのような経緯で誕生するのだろうか。考えられるケースを次に挙げてみた。

- ①空港や港の工事などのプロジェクトでマナドに来たバタック人がマナド人と結婚して工事終了後もそのまま残った。
- ②仕事や大学の関係でジャカルタやジャワで知り合ったバタック人がマナド人と結婚し、妻の希望でマナドに移った。
- ③教会関係で知り合ったバタック人がマナド人と結婚した。

マナドにいるカップルは妻がマナド人、夫がバタック人のケースが圧倒的に多い。メダンではその逆にマナド人の夫、バタック人の妻のカップルが多いのだろうか。また、結婚後のマルガ(姓)をどうするのかも大きな疑問点である。

マナドとメダンは余りにも遠い。中間地点のジャカルタに住んでいても帰郷するのは容易ではない。ましてマナドに定住しているバタック人が故郷北スマトラに家族を連れて帰るのは至難の業と言うより他無い。1年前と比較し倍以上に値上がりした現在の航空運賃では、仮に家族4人が旅行する場合、交通費だけで年収の数年分にも当たり一般庶民では捻出が難しいだろう。一方、船やバスを乗り継いだとしても往復最低20日間はかかってしまい、通常の年休12日間ではとても消化しきれない。また子供連れの大旅行は非常に困難であることが想像に難くない。

果たしてバタック人の夫は何年後に再び故郷の土を踏むことができるだろうか。

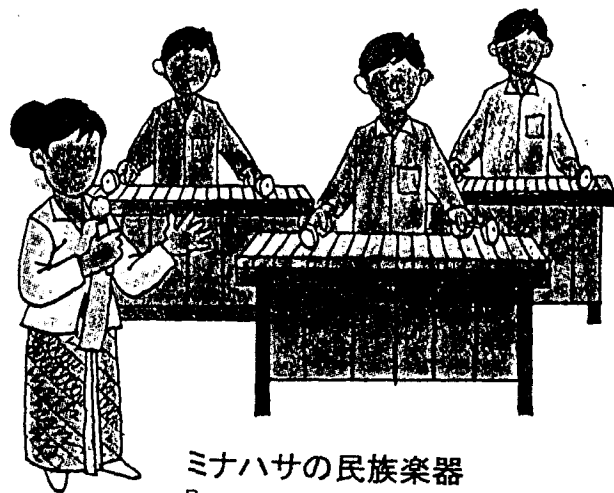
インドネシア人が造語を創ることが非常に得意なことは周知の通りである。巷では「BATMAN」という造語が世間話でよく使われる。これは、「BATAK-MANADO」の略で、バタック人とマナド人のカップルのことを意味する。双方が食材にする《蝙蝠》が掛詞になっているのが味噌である。

一方、ジャワ人とマナド人のカップルのことは「JAMAN」と呼ばれている。オランダ植民地時代には敵対していた両者が結婚するのも《時代/JAMAN》の為せるわざであろうか。

MANGEMO SAKO MANGEMO

MANGEMO SAKO MANGEMO ADU SAYANG  
MANGEMO MAILEILEI LAKO ADU SAYANG KERAWOI

KU LEPASKAN DIKAU PERGI ADUH SAYANG  
WALAUPUN HATIKU BERSEDIH MELEPASKAN KAU PERGI



ミナハサの民族楽器  
『コリントン (KOLINTANG) 』

医学博士  
福岡良男

東北大学医学部名誉教授  
日本インドネシア友好交流協会会長

事務所 千代田区神田駿河台二丁目十九番  
TEL/FAX 03-5281-0283  
アルベルゴ御茶ノ水四丁目二番  
自宅 千代田区北千代三丁目十五番二〇九  
TEL 03-3488-1341  
FAX 03-3488-1212

外務省や拓殖大学でインドネシア語を教えているファリダ・イドリスノ女史はテルナテ生まれのプギス人で、マナド教育大学（当時はマナド市にキャンパスがあった）卒です。  
『テラタイ会』は、同女史が主宰する日本-インドネシア友好団体です。  
下記の文章は、1997年に発行されたテラタイ会創立10周年記念文集に福岡氏より寄稿されたものです。  
戦前の北スラウェシの様子がわかる貴重な資料ですのでここに転載致しました。

筆者の福岡氏の連絡先は左記の通りです。  
テラタイ会の連絡先は下記の通りです。  
Faridah Idris No : 2-19-12 Minami Otsuka, Toshima-ku, Tokyo, Japan  
TEL/FAX : 03-3946-1812

ファリダ先生が青春時代を  
過ごされたマナドで知った人々の心

福岡良男

私は心からインドネシアを愛し、心からインドネシアを理解し、かつインドネシアの一層の繁栄を願っている人間の一人であると確信しています。

私は、第二次世界大戦中に軍医として、臨時召集され（当時大学病院で研修中でした）、ファリダ先生が青春時代を過ごされたインドネシアのセレベス島北部のマナド（独立後はメナドと言いました）地区に送られ、陸軍の軍医として2年間滞在をしました。

ある日の夜、私が滞在していたソンドル町の町長と住民代表が高熱



で苦しんでいる住民がいるので、診療をお願いしたいと部隊を訪ねて来ました。

先任の佐方真三軍医大尉から私が往診するように命ぜられ患者のヤン・センドックさんの家に行きました。

ヤン・センドックさんの背部には大きな濃瘍をともなった「よう」があり、敗血症を併発して、その病状は極めて重篤でした。

早速、濃瘍を切開して排膿を行い、濃瘍を洗浄後、化学療法剤の投与を行ないました。その後、毎日、切開創の治療と化学療法剤の投与のため往診した結果、三週間後には全快させることが出来ました。

使用した化学療法剤は当時、最も新しい抗菌剤として開発されたサルファチアゾールであり、内地出発に当たり武田製薬株式会社が餞別として、私に贈ってくれたものでした。

この薬が一人のインドネシア人の命を救い、日本とインドネシアとの友好の懸け橋になろうとは思いませんでした。

ヤン・センドックさんは全快後、生まれた男の子に私に対する感謝の意を込めて、ハーリー・ヨシオ (Hary Yoshio) とする名前をつけてくれました。誠に光栄で、これほどヤン・センドックさんに感謝されるとは思いませんでした。

召集される前に東京で開かれたマレー語 (現インドネシア語) の講習会に参加して覚えた言葉がヤン・センドックさんとの意志の疎通と診療に、又、現地住民との交流にこれほど役立つとは夢にも思いませんでした。

ヤン・センドックさんは現在 79 才 (平成 8 年 1 月現在) ですが、彼と私との交友はそれ以来 51 年間も続いています。

植民地時代から医療に恵まれなかった現地住民の間にマレー語の判る日本人の医師がいるという噂が広まり、住民から巡回診療をしてほしいという要請がありました。私は先任の佐方真三軍医大尉の許しを受けて、部隊の診療の傍ら住民のために巡回診療を始めました。

ところが数日後、「住民の診療をしてはいけない。部隊の薬品をインドネシア人に使用することはまかりならぬ。兵隊に塗る薬はあってもインドネシア人に塗る薬はない」と言う部隊長からの命令によって実施が不可能になりました。

この話しを聞いた貨物所の坪田定雄准尉から員数外（余分）の薬があるからこれを使用しなさいという厚意ある申し出があり、また、私の部隊の真野晃少尉が陰で色々と援助してくれました。このように佐方真三軍医大尉を始め、これらの人々の善意とヒューマニティに支えられ巡回診療を再開することができました。

この巡回診療は私にインドネシアの人々の生活と習慣に直接ふれる機会を与えてくれたのみならず、彼等と親しく語り合い、インドネシアの庶民の生々しい声を直接聞く機会を与えてくれました。

350年に亙りオランダの植民地として屈辱的な生活を強いられた彼等の心情を聞き、また、「オランダ人以外の立ち入りを禁ず」と言う立て札を見たとき、大きなショックを受けました。また、現地のインドネシアの青年達を集め、日本人が軍事訓練をしているところを目撃しました。この軍事訓練はオランダとの独立戦争のときに大変に役に立ったとインドネシアの中学の教材「インドネシア民族闘争のあゆみ」（Jejak Langkah Perjuangan Bangsa）に書かれています。更に、現地の小学校において日本語と日本の歌を教えている授業を見学することが出来ました。

私が滞在したセレベス島北部のマナド地区はオランダの植民地時代にオランダが最もオランダ化に力を入れ、キリスト教を布教し植民地政府の下級役人、教師、牧師を養成し、オランダの植民統治にオランダ人の手先として協力させた地域でした。

従って、オランダへの協力者と非協力者に対する差別はあらゆる分野で非常に強いところでした。協力者は生活面や教育面で優遇される一方、非協力者は徹底的に冷遇されていました。

われわれ日本人に対しては一部の特殊階級を除き、一般市民は極めて好意的で人情に厚く非常に礼儀正しく、真夜中でも一人歩きのできる安全なところでした。

巡回診療で村を訪れたとき、自分の家に泊まってくれ、私の家で食事をしてくれと言う住民の厚意を断るのに苦勞したほどでした。

夜になると連日、現地の住民が私の宿泊した村民の家に集まってきました。毎晩、夜遅くまで彼等と話し合いました。私と彼等との夜の会話は彼等に外の世界を知る機会を与えることができました。

私は彼等との会話を通じて、現地の人々が明治維新の日本の青年が抱いていたような民族自決に対するすさまじいエネルギーと強烈な情熱を抱いていることを知り、私は彼等のそのエネルギーと情熱の虜になってしまい、インドネシアの人々のために、少しでも役に立てる人間になりたいという気持ちを持つようになりました。

その時以来、私と彼等の間には強い心の絆が芽生え、彼等との友情と交友は現在まで続いています。彼等の希望に満ちた表情が今でも私の脳裏に焼き付いています。

彼等と共に、戦前オランダによって禁じられていた「勝利の歌を」を一緒に歌った感激を何時までも忘れることは出来ません。その歌の意味は

いま、インドネシアに平和が訪れた  
われわれは勝利をかちとった  
われわれの攻撃にかなうものはない  
われわれは勝利をかみしめよう  
われわれは勇敢である、祖国のために命を捧げよう

また、私が巡回診療を終えて村を去る時、彼等は現地の言葉で別れの歌を歌ってくれました。

1. 行くならば、行ってもいいわよ  
    だけど、振り返らないでね  
    さようなら、さようなら
2. 気に障ったことがあっても  
    心の中に、しまっておかないでね  
    さようなら、さようなら

7年前にかつての駐在地のソンデル町とマナド市を友人と共に訪ねました。戦争中にわれわれ日本人は彼等に言うに言われぬ苦痛と被害を与えたので、歓迎されないのではないかと覚悟して行きましたが、人々は温かく迎えてくれました。特に、かつて、私の患者であった人とその子供や孫達から大歓迎を受けました。大勢の人から自宅に来て夕食を共にしてほしいと招待を受け、その純粋な彼等の厚意を

断り切れず、一晩に三度も夕食を食べた日もありました。

その折に、かつて濃瘍の手術をしてあげた元患者のヤン・センドックさんと元看護婦のポリー・エンマさんを私が宿舎にしたメナドのカワヌアシティーホテルに招いて夕食を共にしたとき、それを聞いて元患者やその家族やミナハサ赤十字社のウィンシー・ワロウ先生（医師）をはじめ、関係者 100 人が集まり、私のために盛大な感謝歓迎パーティーを開いてくれました。

又、子供の時に私に命を助けてもらったということを母から聞いて駆け付けてきたという、ソンビ夫人も出席してくれました。意外な訪問者を迎え、驚きと感激の連続でした。

コリンタンのメロディーを聞きながら、また、サゴアイエル（サゴ椰子の花茎から出るカルピスのような汁）を飲みながら彼等と語り、歌い、踊り、楽しい一夕を持つことができました。

ヤン・センドックさんをはじめとする彼等の友情と暖かい気持ちに感謝すると共に、この時ほど医師になって良かった、幸せだという気持ちをもったことはありませんでした。

恩義を忘れない彼等の厚情に涙が出る思いでした。

その後、会議や学会などでしばしばインドネシアを訪れる機会があり、多くの知遇を得ることができました。また、その機会にインドネシアの文化と習慣に直接触れ、インドネシアの歴史を学ぶことができました。特に、インドネシアの人々から独立までの苦難の道のりを直接聞く機会を持てたことはインドネシアを理解する上で最大の収穫でした。

訪問した折りにインドネシアの友人が贈ってくれたインドネシアの歴史書を読み、350 年以上に亘り、絶えず反ポルトガル、反スペイン、特に反オランダ闘争を続けてきた彼等の不撓不屈の精神にはただただ頭が下がる思いでした。

戦後勤務した東京医科歯科大学医学部で教えたインドネシアからの留学生、インドネシアを訪問中、或いは海外の国際学会や会議で知り合ったインドネシアの人々との交友の輪は益々広がって行きました。

これらの人々の紹介で来日するインドネシア人への支援、病気治療のために来日するインドネシア人や、在日インドネシア人への病院紹介、医療通訳、診断書の翻訳、身元保証などを通じてインドネシアとの関係

は益々深まって行きました。

インドネシアは「多様性の統一」の国是のもとに、多数の民族がお互いの考え方の違いを尊重しあって建国した国であります。国語はインドネシア語ですが、各地域には民族それぞれの固有の言語と文化があります。宗教的には殆どの地域の住民は敬虔な回教徒ですが、地域によってはヒンズー教とキリスト教の信者も多く、又、仏教徒もおり、それぞれ異なった風習と生活様式と食生活を持っています。これらの実情を理解することなしにインドネシアを語ることはできません。

インドネシアの人々の日本人観は日本との関係によってどのような体験をしたかにより違います。戦争中の被害や苦しい体験、戦後になってからインドネシアを訪問した一部の日本人がとった無責任な行動によって日本に対して悪いイメージを持っている人もいます。しかし、多くのインドネシアの人々はこのような傷を何時までも持つては日本とインドネシアの将来にとってマイナスであると考えています。日本でも、戦後の世代の人々の間に、インドネシアを心から理解し、インドネシアの文化を研究し、両国の文化と友好を推進しようとする人々が多くなってきたことは両国の将来のために喜ばしいことと思います。

外国の文化、風習、宗教などを真に理解するためには、その国の言葉を知る必要があります。インドネシアを心から理解するためにはインドネシア語を通じてインドネシア文化はもち論のこと、インドネシアが今日まで歩んできた苦難の歴史と日本とインドネシアとの過去の係わり合いを知らねばならないと思います。

最近、インドネシア語を学ぶ日本の若い世代の人と日本語を学ぶインドネシアの若い世代の人が多くなってきたことは両国の相互理解を深めるために、誠に喜ばしいことと思います。

私もファリダ先生をはじめとして多数のすばらしいインドネシア語の先生に恵まれていますので、インドネシア語の勉強を続け、インドネシア語を通じて、インドネシアをより深く理解し、日本とインドネシアとの文化交流と友好を一層推進したいと思っています。特に、専門の医学の分野で貢献できるような仕事をしたいと思っています。

ファリダ先生が青春時代を過ごされたマナド地区は私にとっても青春そのものであり、また、第二の故郷でもあります。マナド地区は山岳

は益々深まって行きました。

インドネシアは「多様性の統一」の国是のもとに、多数の民族がお互いの考え方の違いを尊重しあって建国した国であります。国語はインドネシア語ですが、各地域には民族それぞれの固有の言語と文化があります。宗教的には殆どの地域の住民は敬虔な回教徒ですが、地域によってはヒンズー教とキリスト教の信者も多く、又、仏教徒もおり、それぞれ異なった風習と生活様式と食生活を持っています。これらの実情を理解することなしにインドネシアを語ることはできません。

インドネシアの人々の日本人観は日本との関係によってどのような体験をしたかにより違います。戦争中の被害や苦しい体験、戦後になってからインドネシアを訪問した一部の日本人がとった無責任な行動によって日本に対して悪いイメージを持っている人もいます。しかし、多くのインドネシアの人々はこのような傷を何時までも持つては日本とインドネシアの将来にとってマイナスであると考えています。日本でも、戦後の世代の人々の間に、インドネシアを心から理解し、インドネシアの文化を研究し、両国の文化と友好を推進しようとする人々が多くなってきたことは両国の将来のために喜ばしいことと思います。

外国の文化、風習、宗教などを真に理解するためには、その国の言葉を知る必要があります。インドネシアを心から理解するためにはインドネシア語を通じてインドネシア文化はもち論のこと、インドネシアが今日まで歩んできた苦難の歴史と日本とインドネシアとの過去の係わり合いを知らねばならないと思います。

最近、インドネシア語を学ぶ日本の若い世代の人と日本語を学ぶインドネシアの若い世代の人が多くなってきたことは両国の相互理解を深めるために、誠に喜ばしいことと思います。

私もファリダ先生をはじめとして多数のすばらしいインドネシア語の先生に恵まれていますので、インドネシア語の勉強を続け、インドネシア語を通じて、インドネシアをより深く理解し、日本とインドネシアとの文化交流と友好を一層推進したいと思っています。特に、専門の医学の分野で貢献できるような仕事をしたいと思っています。

ファリダ先生が青春時代を過ごされたマナド地区は私にとっても青春そのものであり、また、第二の故郷でもあります。マナド地区は山岳

(クラバト山、1995M)、湖(トンダノ湖など)、島嶼(ブナケン島は美しい珊瑚礁とスキューバダイビングで有名)を始め、すばらしい自然に恵まれているだけでなく、巨石時代の遺跡と考えられているワルガ(Warga)を始めとして様々な遺跡があり、ジャワ、バリ、スマトラとは異なった文化を持った地区です。

また、現地の人々の人柄も人情もすばらしく良いところです。

マナド地区は日本の海軍の落下傘部隊 600 人が降下(正確にはマナドの南西 60 km のカラビラン-Kalawiran-に降下)し、オランダ現地軍と戦ったところでもあります。オランダ現地軍が3日間で降伏したために、殆ど被害を与えることはありませんでしたが、落下傘部隊の 58 人が戦死しました。

その後、連合軍の日本軍に対する連日の空襲によって、現地の人々に甚大な心的、物的被害と苦難を与えてしまったところです。特に、北部セレベス等の中心地であったマナドは連合軍の大空襲によって壊滅的な被害を受けた都市です。

海軍の落下傘部隊長の堀内豊春中佐は現地住民を非常に大切にし善政をしかれ、現地住民から敬慕された人間的に立派な方でした。堀内豊春氏を敬慕して現地住民によって作られた堀内豊春氏の慰霊碑がマナドのテーリン墓地にあります。

マナドには日本軍が守備を固め、避難するために作った洞穴が数多くあり、その内、数箇所は戦争の遺跡として残されています。

スキューバ・ダイビングで訪れる観光客を除き、戦前戦後を通じてマナドを訪れる一般観光客はあまり多くありません。また、マナド地区に居住している日本人も、他のインドネシア地区に比べて大変に少ないようです。

テラタイ会主催、ファリダ先生の故郷を訪ねるツアーには是非とも参加されることをお勧めします。

インドネシアを単なる観光地として理解するだけではなく、インドネシアの文化と歴史のみならず、インドネシアの人々の心を理解できる旅になるよう願っています。

[終]

ジェネポイント県はウジュンパンダンから南へ約2時間半、南スラウエシ州で最も乾燥した気候の貧しい地域である。昔から出稼ぎが多く、とくに州都ウジュンパンダンのベチャひきの多くはジェネポイント県の出身者であるといわれる。

数週間前、「ジェネポイント、飢えの危機」という見出しが地元タブロイド紙『パンチャシラ』の表紙を大きく飾った。記事は「ジェネポイント県の農村では食糧が底をつき、シカパと呼ばれる野生のイモを住民が食べている」という内容であった(シカパは毒性があり、十分な毒抜きが必要である)。

今回の視察(7月30日)では、ジェネポイント県のいくつかの農村を訪問し、経済危機下に貧しい農村の状況を若干なりとも把握しようとした。

### <天水が頼りの農業>

ジェネポイント県で最も状況がひどいのは、県西部のパンカラ郡及びタマラテア郡の海よりの半島部にある地域である。半島部の端には河川が流れているが、半島部地域の標高のほうはやや高いので灌漑水路を延長させることが難しい。また、地下水は容易にマカッサル海峡へ流れ出してしまうため、大木の幹を除いては水が溜まり難く、井戸を掘っても水の出ないところが少なくない。農業は天水に頼る状況で、昨年来の乾期の長期化により、この地の農業生産は壊滅的な状況となった。

訪問した二つの村(タマラテア郡ポロンタラ村及びパンカラ郡プナガヤ村)では、主要作物のトウモロコシは、これまでに三期分の収穫が全くできなかった。農民は、少しでも雨があるたびにトウモロコシを植えるが、10センチ以上はなかなか育たない。他の作物も全く育っていない。ポロンタラ村のマメはさや全体が黒くなっていて収穫不可能だった。二つの村ともに、地域の食糧ストックはない状態で、その日その日に村外の市場へ行ってトウモロコシや米を買ってきて凌いでいる。

### <ベチャひき収入への依存>

なぜ、トウモロコシや米が買えるのか。これらの村の男たちは、毎週、州都ウジュンパンダンに出てベチャひきをしており、そこで1日5000ルピア程度の現金収入を得ている。このベチャひきによる収入で村民は何とか食べている。父親を助けるために、小学校や中学校ぐらいの男子も父親と一緒にウジュンパンダンへ出てベチャをひいている。女性の多くは、作物生産が事実上困難なため、家で夫や子供がウジュンパンダンから持ってくる現金や米を待っている。なかにはウジュンパンダンやジャカルタの工場へ工場労働者として働きに出ている娘もいる。

村民は、今のところ1日に2回は食事をとれている。ポロンタラ村ではトウモロコシが主食で、一人当たり1日に10本程度(0.5リットル)のトウモロコシを食べる。このトウモロコシは小ぶりで、外皮をむいた中身を食べるので、実際には半分の量になる。プナガヤ村では、皮をむいたり面倒なトウモロコシよりも手っ取り早い米を買って食べる。トウモロコシはキロ1300ルピア、米はキロ1950ルピア(通常はリッター売り。1キロは約1.3リットル)である。

村に多く生えているロンタラ椰子からは、パローと呼ばれるロンタラ椰子の樹液を使った飲み物や椰子砂糖をつくる。パローを飲んでイモでも食べればけっこう腹持ちがするとのことであった。ロンタラ椰子の実は1個200ルピアで売るといふ。

### <季節外れの雨の弊害も>

今年の乾期は比較的雨が多く、ジェネポイント県も例外ではない。それだけ見ると乾燥の激しいジェネポイント県にとってはよさそうに見えるが、話は単純ではない。

プナガヤ村の海岸の地域では、海草を干していた。海草は収穫にわずか40日しか要さず、キロ4500ルピアで売れる。年間で25キロぐらい収穫できるが、収穫期は8~10月のわずか3か月に限られる。また、プナガヤ村には塩田があり、農民は塩田所有者から借金をし、それを取れた塩で返済している。現在は乾期のはずだが、例年に比べて雨量が多いため、塩の生産は芳しくない。先の海草も雨が降ると乾燥できないし、海中の海草が死んでしまうので収穫が減る。海草や塩など副収入が期待できるが、収入がないリスクもかなり高いと言わざるをえない。



前述のように、雨が降るたびに農作物を植えても、基本的に水が溜まり難い土壌の性質などにより、期待するような農業生産の改善は果たされていない。

#### <土地所有問題の影>

訪問した村では、農民はいずれも短期的に収穫可能な農作物の栽培を選好していた。彼らが長期的観点に立った農作物生産を行なおうとしない理由の一つは、土地所有にあるとも示唆される。すなわち、農作物生産を行なっている間に突然地主が現われ、クレームをつけるといった事態がある。クレームがついた場合にすぐに土地を手放せるように、短期的に収穫可能な農作物の生産を行なっているとも解釈できる。また、ヤギを飼っている農家があるが、ヤギを育てる土地がなく、隣家の土地にヤギが入り込んで係争になるケースもあるという。

#### <食糧配布について>

訪問した二つの村では、これまでに県政府による食糧配布があった。たとえばトラック1台に50キロ入りの米袋を45袋積んでやってきて、1袋1~2リットルに小分けにして配布する。しかし多くの場合、まず村長や村役人がまずもらい、残りが住民に配られるため、今回話を聞いた住民でもらった人はいなかった。また、プナガヤ村では結婚年齢が低く(平均で男15歳、女13歳)、しかも男が早死にするため未亡人が多いのだが、未亡人は女性ということで食糧配布の対象にならなかったということであった。

#### <まとめ>

南スラウェシ州は、カカオやコーヒーの市況好転でブームが起きて経済的に潤っていると評価されている一方で、そうした商品作物を持たない乾燥したジェネポント県では経済状況がかなり悪化している。農産物生産が期待できない現状で、彼らの生存は家長のウジュンパンダンでのペチャひき収入にかかっている。食糧は流通しており、現金収入さえあれば、今のところ、食糧の調達に深刻な問題は起こらないと考えられる。彼らの現金収入の道が絶たれないような働きかけが差し当たり必要と考えられる。

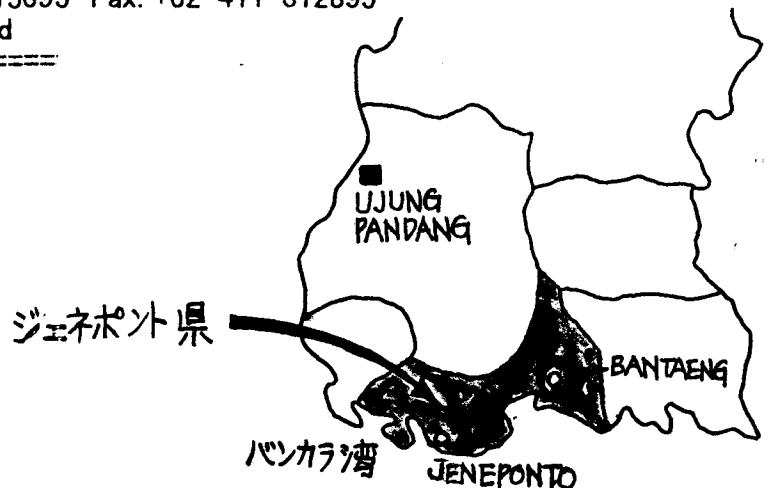
ジェネポント県は今回の経済危機で急に苦しくなったわけではなく、これまでの状況が一層悪化したと解釈できる。本来的に農業生産に適した土地ではなく、そこで収入の道を農業に制約するならば現状の改善にはならないだろう。今の状態では、家長によるペチャひき収入は不可欠であり、ウジュンパンダン市が本格的にペチャの制限に動き出した場合、それがジェネポント県の農村に与える影響は大きいと考えられる(ペチャ制限をしない場合にはさらに多くのペチャひきの流入を招く可能性もあるが)。ペチャを利用した新たなビジネスの開発などが望まれる。また、農産物生産が難しいなか、ペチャひきによる現金収入を待つ農村の女性たちがその待ち時間を手工芸品の作成などに費やせれば、追加的な現金収入が期待できる。

ジェネポント県の農村の貧困問題は中長期的な問題でもある。これに対しては、上記のような、ウジュンパンダンに出稼ぎに出ているペチャひきの事業改善と農村女性の新たな雇用創出の両方に対応するような何らかのプログラムを考案することも一考ではないか。

1998.07.31

MATSUI Kazuhisa / JICA Expert  
JICA-BAPPENAS Project (Policy and Implementation  
Support for the Development of East Indonesia)  
Office Phone/Fax: +62-411-452816  
Residence Phone : +62-411-315695 Fax: +62-411-312895  
E-Mail: kmatsui@upg.mega.net.id

(右記地図は編集部作成)



# 南の島の知性

—南太平洋ソロモン諸島より

宮内泰介

南太平洋の国、ソロモン諸島のアノケロ村。スティーブン・ラドフォダさんは、この週末、お父さんのエリファウさんや弟のエディが住んでいるアノケロ村に里帰りしていた。スティーブンさんは、アノケロ村の出身だが、車で数時間かかる遠くの診療所で保健士として働いている。新しい家の建築をお父さんに頼んでいたのも、その進みぐあいを見に帰る意味もあった。スティーブンさんの子どもたちも一緒に帰ってきて、近所の子どもたちと一緒に遊ぶ週末だった。

さて週が明けて、スティーブンさんも仕事に戻らなければならない——と、思いきや、帰る様子がない。彼が働く診療所は、彼と奥さんしかいない。彼がいなければ、住民も困るだろう。

「スティーブンさんはいつ帰るのだろう？」

それとなくエディに聞いたら、あっさりとした答えが帰ってきた。

「さあ、どうだろうか。私もわからない。彼は今仕事が嫌になっているんだ。最近も診療所の近くで親族グループ間の喧嘩があって、何人もけがをすることがあったらしい。帰りたくないようだ」

そうは言っても、しかし——。

「彼のような人はソロモンでは珍しくない。私たちは白人や日本人と違う。仕事に疲れたら村に戻り、もう仕事には戻らない、というのはよくあることだ。雇用者が呼び戻そうとしても、もどってこない」村や家、畑や森、土地、家族、親族。これらはソロモンでは、お金以上に頼りになる存在である。たとえば住民がファサと呼ぶ木は、薪としても、建材としてもたいへん重要な木だ。畑は、タロイモやサツマイモを中心に自給用の焼畑を行なっている。これらが存在しているかぎり、賃金労働は、二次的なものになる。

ファサという木が住民を支え、川が魚を供給し、という話を続けると、私たちは「熱帯の楽園」をイメージしてしまう。自然が豊かで、住民はたいして働かなくとも生きていける、という南洋イメージだ。しかし、これは危険だ。一見自然に見えるものは、長い間かかって彼らが作り上げてきた環境であり、彼らがそれを守り利用するシステムを維持してこそ意味のあるものなのだ。

「私たちは、白人や日本人と違う。白人や日本人は金に依存して生きているけれど、私たちは違う」

エディの言い方は、ソロモンの方がだから優れているというふうでもなく、また、だからソロモンはだめなんだというものでもない。金に依存した社会での生き方と、そうでない社会の生き方はおのずと違うのだ、と冷静に見ているように私には思われる。そのエディがあるとき面白いことを話してくれた。「小さいころ、父が話してくれた。川に生息しているワニは、お墓に埋められた死体が、お墓から抜け出して変身したものだ、と」

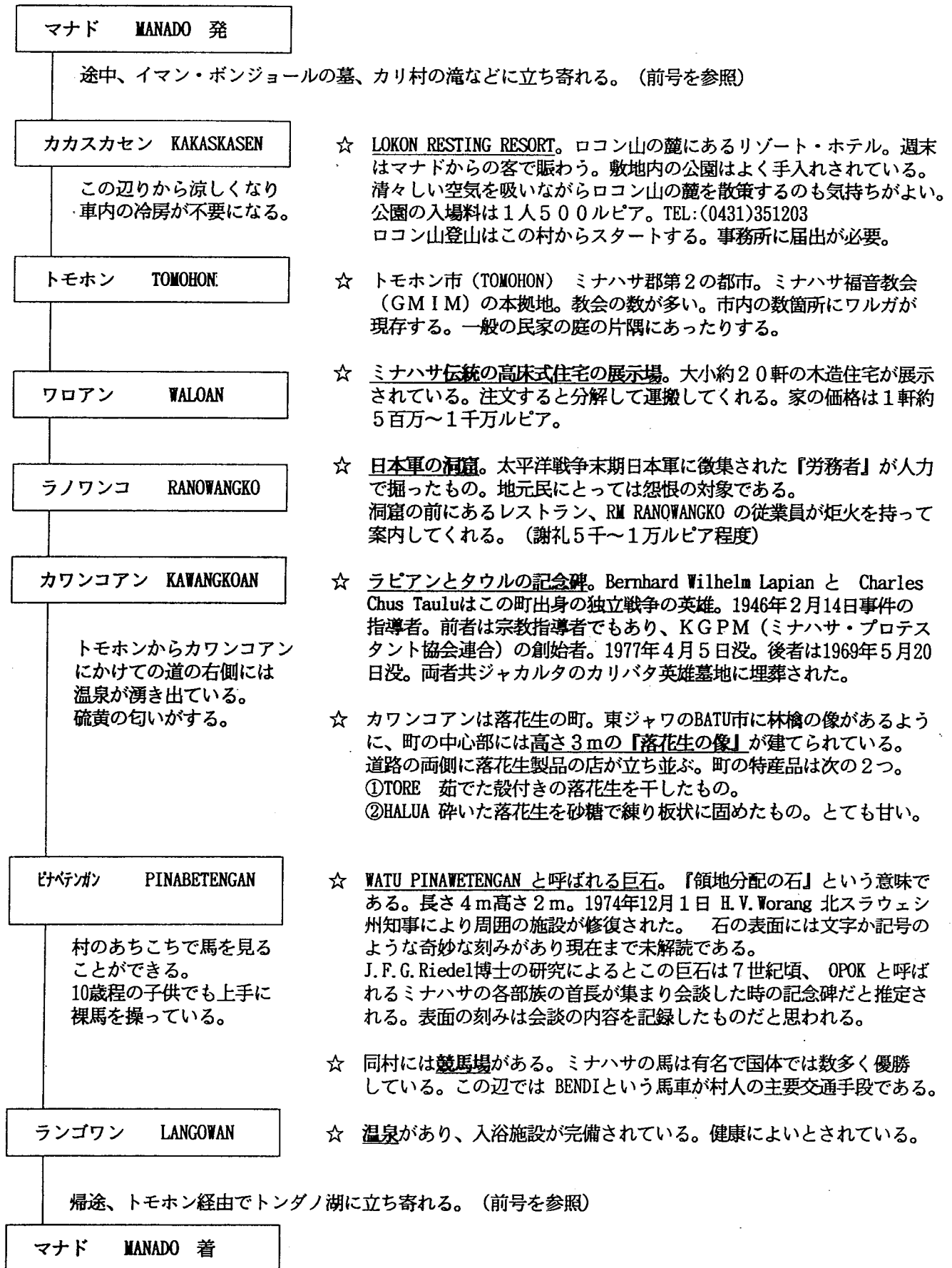
神秘好きの私の連れ合いは、身を乗り出した。エディは続けた。

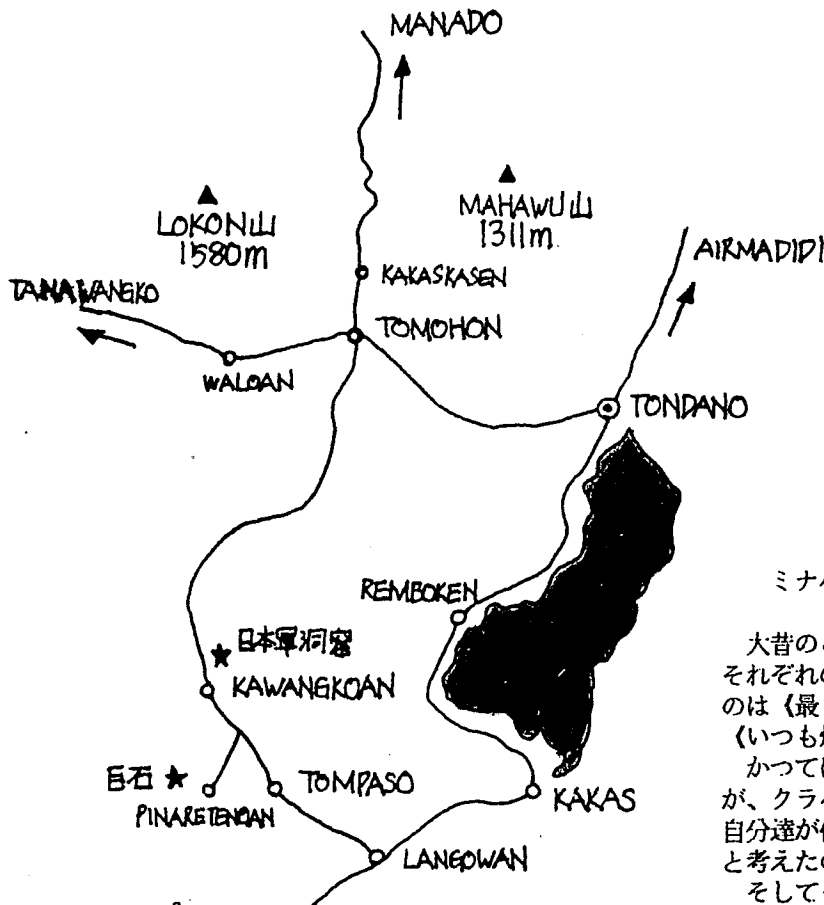
「聞いた時は恐かった。しかし、そののちに私は考えたんだ。ほんとうだろうか、って。よく考えて、こう結論した。やっぱりそれは間違いだ、と。父はまだ信じているけれど」

私はこういう知性が好きだ。頭から信じるでもなく、頭からばかばかしいと否定するでもなく、自分で考えて結論づける。近代科学ばかりを信用するのでもなく、近代科学を否定するのでもない。自分の判断で、ひとつひとつ冷静に検証する。上から与えられたものをこなすことばかりを教える学校教育が大勢の日本社会では、いまこれがもっとも必要とされているのではないか。

エディは初等教育しか受けていない。本当の知性というものは、学校で教えてもらうものでも、本から学ぶものでもないことを、私は南の島で教えられた。

火曜日、お兄さんのスティーブンさんは、ようやく観念して、帰ることになった。道路でトラックを小1時間待ったあと、ようやく彼の職場の村行きのトラックがやって来て、スティーブンさんと奥さんのベルナディナさんは、トラックの荷台に乗りこんだ(この付近ではトラックがバス代わりである)。兄弟の週末は終わり、日常がまた始まった。





**ロコン山とマハウ山**

Lokon 山(1580m) と Mahawu 山(1311m) は何れも活火山であり、煙を出している火山湖を有している。

ロコン山の方が美しく、その湖水は鷺鳥の卵のような青色をしており、水深は約60m である。

火口は頂上より600m下にある。カカスカセン村を朝7時に出発すると午前中の涼しい時刻中に火口に到着できる。出発前には登山管理事務所に届出をするのを忘れないこと。

**ミナハサの民話 『ロコン山とクラバット山』**

大昔のことじゃ。ミナハサには数多くの山があった。それぞれの山には名前の由来があった。ロコン山というのは『最も古い』という意味で、マハウ山というのは、『いつも煙を出している』という意味だったのう。

かつてはロコン山がミナハサで一番高い山だったのじゃが、クラバット山に住んでいる者達はそれを不満に思い、自分達が住んでいるクラバット山を一番高い山にしたいと考えたのじゃ。

そしてクラバット山の住民は皆でロコン山に出かけ、ロコン山の山頂を削り始めたのじゃ。削った土は自分達のクラバット山まで運び積み上げたのじゃ。こうして、とうとうクラバット山がミナハサで最も高い山になったのじゃ。

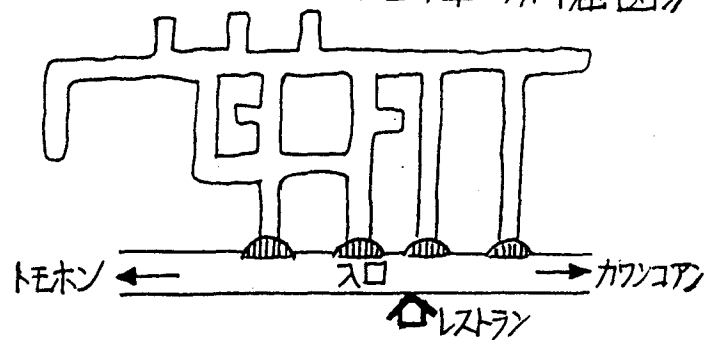
そうそう、クラバット山の住民が土を運ぶ時、土が少しずつこぼれていてのう。そのこぼれた土が積み重なり、カセヘ山、タタウィラン山、エンブン山となったのじゃ。

◎ロコン山の山頂は尖っておらず、途中で別られたように平らである。



クラバット山の住民はロコン山の山頂を削り始めた。

**《日本軍の洞窟図》**

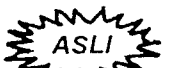


カワンコアンにある落花生菓子の店『タルジウス』



HALUA NOUGAT KACANG

**Tarsius**



100 % Halal

KAWANGKOAN

Komposisi : Gula, Kacang Murni

Merk Terdaftar : Depkes R.I. S.P. No. 731/18.04/1996

## 交通事故発生時における対応

### 1. 本人又は家族が遭遇した場合

- (1) 本人又はその家族は警察への連絡、救急車の手配、病院の手配又は入院手続き等、法律義務又は一般義務として取らなければならない行為（人命救助等）を最優先して行うこと。その国の実情にあった対応策を前もって研究しておくこと。
- (2) 次に、出先国の事業所の責任者に交通災害発生的事实を知らせる。その情報収集の6原則は、
  - 1) 「何が」発生したか
  - 2) 「いつ」発生したか
  - 3) 「どこで」発生したか
  - 4) 「なぜ」「どのように」発生したのか  
(緊急事態の内容によっては、その時点で想定される原因や理由等の報告も必要)
  - 5) 「誰が」どうしたか（行動）  
「誰が」どうなったか（状況）（被災者の氏名、被災の度合いなど）
  - 6) 「現在の状況」はどうか  
(場合によっては、今後の見通しに関する情報も必要)。
- (3) 出先国の事業所の責任者（又はその代行者）は、事実を本社（海外事業部）に第一報として連絡すると同時に、被災者のための最善策を判断し、実行すること。
- (4) 出先国の事業所の責任者（又はその代行者）は、必要に応じて、保険会社との連絡又は弁護士との連絡を取りながら、早急に被災者のいる場所に行き、対策を指示し、その都度、本社（海外事業部）に連絡を取ること。
- (5) 本社（海外事業部）は、事実を必要な部署に報告すると同時に、必要に応じて留守家族又は実家に十分な判断に基づいて連絡をする。本社として、最善の対応を判断し、実行すること。

(6) 衝突事故等の際、相手を刺激するような非難はせず、又簡単に当方から謝ってもいけない。昼間で人通りの多い場所であれば、事故の目撃者等の証人を探し、電話番号等を聞いておくこと。

(7) 夜間に複数の男が乗った車におつけられた時は、偽装襲撃である可能性が強いので、あわててドアを開けてはならない。場合によっては、すぐ警察に飛び込むこと。

### 2. 同僚が遭遇した場合

対応方法は、上記1. 本人又は家族が遭遇した場合と同様である。

### 3. 現地人が遭遇した場合

(1) 赴任地にて、現地人が交通事故に遭遇した場合には、それぞれの国の国情によって、ベストな対応方法が異なるので、現地に赴任した時点で、現地の国情に詳しい人に、ベストな対応方法を尋ねる必要がある。

(2) 国によっては、現地人の事故現場で、付近の人々に囲まれてリンチを受けるようなこともあるので、負傷者の救助よりも先に、近くの警察署への報告を優先させるべき場合もある。しかし、一般的には、人身事故の加害者になった場合、人命救助を第一義とし、周囲の状況を判断するとともに、相手の傷害の程度を確認の上、必要に応じて緊急医療の手配を行うと同時に、警察に連絡、大使館に報告し、保険会社に連絡すること。

(3) お見舞い金等の事後処理も、現地の相場・習慣を守る必要がある。

## その他の事故における対応

### 1. 基本方針

- (1) 海外における社員及び家族の身体の安全を事故から守り、かつ業務や日常生活への速やかな復帰への支援を行う。
- (2) 海外で事故に遭遇した際、当事者や組織が、可能な限り、合理的かつ円滑に対処できるように、当事者や組織の行動指針を定め、日頃からの準備事項等を講ずる。
- (3) 事故の内容・程度により、組織的な対応レベルを設定する。

### 2. 緊急行動指針

#### (1) 当事者の行動指針

海外において事故に遭遇した時は、まず自らの身体の安全を図り、速やかに緊急連絡先に第一報を入れたのち、状況の把握に努める。

#### 1) 緊急連絡先

①勤務時間内は所属部署（当事者が所属する海外工事事務所等）

②勤務時間外は、上司の自宅（例えば、海外工事事務所の所長等）

#### 2) 状況の把握

①何が起こったか＝事態の種類

②いつ起こったか＝発生・発見の時刻

③どこで起こったか＝場所

④なぜ起こったか＝推定される原因

⑤影響はどうか＝人身、施設、財産についての影響

⑥今どうなっているのか＝自己の負傷等を含め、現状対応の進行状況

⑦これからどうなりそうか＝事態の発展性、対応の効果

⑧連絡先＝住所、氏名、電話番号

#### (2) 組織の行動指針

海外で被災した社員・家族の被害を最小限とすべく、救

助・援助、業務復帰等につき組織的な支援を行う。

事故の規模・内容等により、所管あげての対応が必要と判断される場合は、海外事業部長を、本部長とする「所管災害対策本部」を海外事業部に設置し、災害対策活動を行う。さらに全社的な対応が必要な場合は、所管災害対策本部長からの要請により、社長を本部長とする「本社災害対策本部」を本社に設置する。

#### 1) 所管災害対策本部

##### ①構成

海外事業部長（代・副事業部長）、総務部長、土木部長、建築部長、事務課長

##### ②活動内容

- ・情報受発信の窓口となる
- ・構成員の役割分担を決定する
- ・把握した情報を逐次本社に報告すると共に、必要に応じ、家族等関係者へ連絡する。
- ・政府関係機関（外務省、大使館、総領事館他）や商社等からも幅広く積極的に情報入手に努める。

#### 2) 本社災害対策本部

##### ①構成

その他の事故に関する「本社災害対策本部」の組織表は、各社の基準に従う。

##### ②活動内容

- ・構成員の役割分担の決定
- ・被災役職員、家族の救護・援助と長期的な支援策の立案・決定
- ・業務の正常化策の立案・決定

##### ③広報活動

- ・必要に応じ、事態を役職員に周知
- ・災害に関する情報の収集
- ・必要ある場合、報道機関への統一見解の発表
- ・家族への役職員の安否情報の伝達

### 3. 平常時の備え

不測の事態に備えて、日頃から防災意識の高揚を図ると共に、必要な対策を講ずる。

- (1) 通常の通勤交通手段の他に、代替交通機関を把握しておく。
- (2) 被災時の家族との連絡ルートを複数用意しておく。
- (3) 英文・和文の身分を証明するもの、緊急連絡先表、血液型等を控えた「我が家の防災カード」を常時携帯する。
- (4) 最小限度の水、食糧、医薬品、燃料等を備蓄する。
- (5) 当社職員や在留法人との最新の連絡網を確立しておく。
- (6) 避難が必要となった場合を想定し、避難場所、避難方法を周知確認しておく。
- (7) 国外脱出可能なように、エアーチケット及び必要最低限の現金を用意しておく。
- (8) 日頃から重要書類及び貴重品の管理を徹底する。
- (9) 携帯電話の所持、又は簡易通信手段を講じておく。

#### 肩越しに視線をとばす

日本の観光客や新米の駐在員がスリ、ひったくり、置きびき、その他もろもろの被害にあうのはスキありとみられるから。写真やビデオの撮影やショッピングに夢中になるから。

財布に現金をたくさん入れていることが知れているから。

ニューヨークで専門家がそんな日本人を観察してどうも日本人は肩越しに視線をとばさない (They don't look over their shoulders) ようだとコメントしている。

要は接近してくる者を警戒することだ。

#### 日本人と見られるかどうか

多くの図書にもある通り、日本人は金持ちと思われ金銭犯罪に巻き込まれるケースが多発しています。それでは、日本人と見られないようにすれば問題が解決するか、と言うとそうとばかり言えないのです。それは例えば、他国のアジア系外国人が経済の実権を持つ国が東南アジアには多くあります。そしてそれに対する反発からデモや襲撃事件になることがあります。又欧州においてはアジア系難民を受け入れている国では難民の流入が現地の人の失業率の増加の一因になっている事があります。

このような場合日本人と他のアジア諸国の人と見分けのつかない現地人から誤認されて嫌がらせや排斥を受ける可能性があります。

つまり日本人であると容易に判別されてしまうと金銭を狙われ、又一部地域のアジア人と思われると身体に危害を加えられる恐れがある、という事態になります。

緊急事態に備えてのチェックリスト

項目	チェック
連絡体制の整備	
1. 在留届を提出済みである。	
2. 住居等の変更を届け出ている。	
3. 電話機の近くなどの見易いところに緊急連絡網図が置かれている。	
4. 警察・航空会社・旅行代理店等の電話番号を知っている。	
5. 現地人スタッフとの連絡方法はある。	
旅券・査証他	
1. 旅券の残存有効期間が6カ月以上ある。	
2. 滞在査証の有効期限が切れていない。	
3. 出国査証・再入国査証の取得方法を熟知している。	
4. 最終頁の「所持人記載欄」に必要事項を記載している。	
5. 万が一に備え、同頁余白に血液型を記入している。	
6. 旅券・IDカードは手元にある。	
7. 手続き用(申請等)の顔写真がある	
8. 運転免許証がある。	
現金・貴金属等	
1. 旅券と共に、すぐに持ち出せる場所に保管されている。	
2. ある程度まとまった外貨及び現地通貨を準備している。	
3. 飛行機のオープンチケットを用意している。	
非常用物資の備蓄 10日間程度の備蓄がある。	
1. 非常用食料(乾パン・缶詰・レトルト食品等)	
2. 飲料水(ミネラルウォーター)	
3. 燃料(ガソリン・ガス・ローソク・ライター)	

項目	チェック
緊急時携行品 移動に便利なバックに詰めてある。	
別紙〈緊急避難時持ち出し品リスト〉による	
自動車の整備・点検	
1. オイル交換等により、常に整備に努めている。	
2. 燃料は常に十分入れている。	
3. ガソリンを備蓄している。	
4. 地図・懐中電灯・ティッシュペーパー・毛布等を積み込んでいる。	
緊急時避難先	
1. 日本大使館及び日本大使公邸の位置を承知している。	
2. そこへ至る複数のルートを想定している。	
3. 一時的洪水・火災等から逃れる高台を知っている。	
その他	

コミュニケーション

自然災害等に見まわれそうになった、もしくは被災した時のために、常日頃から現地における各国の大使館または領事館とのコミュニケーションを図っておくことは、非常に有効な手段である。

特に先進各国とのチャネルを持つていることは、国外への脱出他超緊急時に軍隊による大きな援助・サポートが期待できる。

日本から遠い国においては、地理的な条件からも、我が国の素早い対応を求めることは現実的に可能とはいえない。



海外ではちょっとした身体の不調を我慢しがちですが、そのために手遅れになるケースが少なくありません。そこで、毎日少しの時間で、自分でできる健康のチェックポイント八項目を二回に分けてお教えします。

**チェック1** 寝付き、目覚めはいいですか？  
 睡眠障害は、いろいろな脳神経系疾患や心不全の初期に見られます。  
**チェック2** 尿のおいしさは？ 濁りや排尿痛、残尿感はないですか？  
 頻尿で尿量が多く（一日三四回）、芳香臭のある泡立つ尿

**注意**

が出るようになったら、糖尿病を疑います。また、黄疸（おうだん）があり、茶褐色のネズミ臭（カビの生えたようないやな臭い）のする尿が出た時は、肝臓病が考えられます。濁り（時に血性）があり、排尿痛、残尿感があれば、ほつら炎の可能性もあります。五十歳以上の男性で残尿感・頻尿のみの場合は、前立腺肥大を考慮してください。

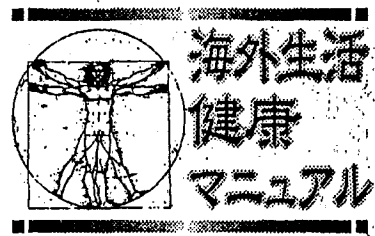
**チェック3** 鏡を見て、白目の充血、黄色変化はないでしょうか？ 顔の色は？ むくみは？ 舌の色は？  
 白目（眼結膜）は通常は白色ですが、眼精疲労などで充血

院長 病院長 西内科 関内 大原 知樹

**見発病に早め 我慢せず 不調**

するほか、高血圧やせきの多い疾患では、出血することがあります。また、黄疸の出現は疾患（胆石、肝炎、肝硬変、肝がんなど）では、白目の黄染や黄疸に気づくことがあります。

**チェック4** 大便の色、固さは？ 便に血液や粘液が混じっていませんか？  
 下痢は急性の場合と慢性の場合があり、急性は暴飲暴食による急性腸炎や大腸がんによる必要があります。慢性肝炎は、50%がアルコールが原因で起こり、脂肪の多い食事を食べた後などにそのやや左を中心とする腹痛が起こるのが特徴で、便はいつもゆるく、脂肪の吸収が悪いため、時に下痢便に脂肪滴が混じることがあります。



ようになり、血管が見えなくなりますが、そのほか、貧血が強いと、眼結膜は蒼白（そうはく）となるので、黒色便と一緒で認められた時は、消化管の出血を疑います。

同様に、顔色が病気をよく反映します。黄色は黄疸で肝疾患を、蒼白色は貧血を、赤みを帯びた顔で青い唇は呼吸器疾患を疑います。顔のむくみは腎臓病でよく見られますが、そのほか

国立感染症研究所 感染症情報室長 岡部 信彦

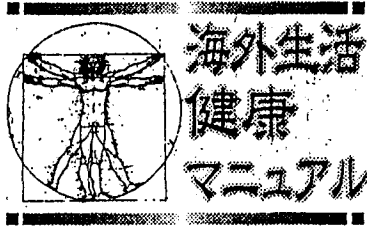
**蚊の繁殖や家への侵入に注意**

**デング熱**

け、穴があいていないように注意するなど。そして、なるべく蚊に刺されないようにすることが最も重要です。

治療：デング熱に対して特別効果のある治療法は残念ながらなく、抗生剤も無効です。ワクチンは開発中の段階です。症状をやわらげるための対症療法と発熱による体内の水分低下（脱水）を防ぐことが治療の中心となります。通常は「かせ」と同じ考え方で家庭で対処して問題ありませんが、熱が3日間以上続く、足腰が痛くとてもだるいといった症状があるときは、医療機関で受診した方がよいでしょう。鼻血、歯ぐきからの出血、血便などが見られたら、迷うことなく受診すべきです。

熱が出ると解熱剤を使う人が多いと思いますが、解熱剤の中でもアスピリンはデング熱による出血しやすさをさらに増強するので、デング流行地での使用は原則的には避けた方が賢明です（アスピリンは止血に重要な役割を持つ血液内の血小板の作用を弱めます）。もちろん、どのような解熱剤でも使い過ぎないような注意が必要です。



デング熱（dengue fever）とは、蚊（*Aedes aegypti*：熱帯シマカ）に刺されることによってデングウイルスが感染し、高熱、発疹（ほっしん）、全身のだるさと骨や筋肉、関節の痛みなどの症状が現れる、熱帯・亜熱帯地方に多い感染症です。基本的には自然に回復する軽症の疾患ですが、出血しやすくなったり、時に血圧が急激に低下し死に至ることもあるので、症状の変化には注意が必要です。

日本国内ではなじみが深いのですが、アジア太平洋地区では日常的な感染症で、最近では南米でもその数が増加しています。世界保健機関（WHO）では、地球上に住む5人に1人はデング熱の脅威のもとにらし、年間数百万人の患者発生と数万人単位の死亡があると推定し、流行地域と患者数はこの10年間で拡大と増加の傾向にあると警告しています。

熱帯シマカは、人の生活圏内で繁殖し（家の周りの水かめ、たまり水、花瓶の中の水など）昼間に行動するので（注：マラリアを運ぶ蚊は夜間に行動する）、蚊の多いような環境、とくに雨期には、

います。

デング熱にかからないための日常の注意点や、かかった後の治療法は下記の通りです。

注意：ボウフラがわからないようにすること（家の周りに水たまりなどを作らない、放置しない）。蚊が身近に来ないようにすること（窓にはスクリーンをつ

在留邦人各位

平成10年10月1日

年内の当国での主要日程を以下の通りまとめてみましたので、ご参考までにお知らせいたします。  
なお、これらの行事日程はあくまで「予定」の日程であり、変更の可能性もありますので予めお含み置き下さい。

### 年内主要日程

<10月>	1 (木)	聖なるパンチャシラの日。( Hari Kesaktian Pancasila )
	5 (月)	国軍記念日。
	8 (木) ~ 10 (土)	メガワティ派PDI大会。(バリ)
	20 (火)	ゴルカル34周年記念日。 (例年ゴルカルはこの日に党大会を開催していたが、今年は7月に繰り上げ臨時党大会を実施した。)
	28 (水)	青年の誓いの日。( Hari Sumpah Pemuda ) (1928年のこの日、インドネシア各地の青年が集まり、インドネシア人、インドネシア語が唯一の祖国、民族、言語であることを誓った。)
<11月>	1 (日)	電気料金20%値上げ。 (全5回に分けた値上げの第3回目。5月が初回。)
	10 (火) ~ 13 (金)	<予定>臨時国民協議会。
	12 (木)	東ティモール・ディリ事件7周年
	17 (火)	預言者ムハンマド昇天祭
	17 (火) ~ 18 (水)	APEC首脳会議。(於：マレーシア) 大統領出席。)
<12月>	7 (月)	1974年のこの日、東ティモールへ「イ」国軍「義勇軍」侵攻。
	14 (月) ~ 17 (木)	ASEAN首脳会議。(於：ハノイ) 大統領出席。)
	20 (日)	断食月開始。
	25 (金)	クリスマス。

#### ■シーラカンス、インドネシアにもいた——英誌に捕獲発表

第2の群れ、存在か——アフリカ沖以外で初

約4億年前に地球上に現れた原始的な魚類で「生きた化石」といわれているシーラカンスが、インドネシア沖で発見、捕獲されたと、米カリフォルニア大学バークレー校のロイ・コールドウェル教授とインドネシア科学協会の調査グループが、24日発行の英科学誌「ネイチャー」に発表した。

シーラカンスはアフリカ南部のインド洋側にしかいないと考えられてきたが、新発見場所は1万キロも離れており、広く生き残っている可能性が出てきた。

発表によると、今年7月、インドネシア・スラウェシ島沖で、29キロのシーラカンスが捕らえられた。アフリカ沖で繁殖しているものが移動してきたとは考えられず、第2の繁殖集団が存在しているとみられるという。

シーラカンスは、水から陸に上がって現在の陸生せきつい動物の祖先となったと考えられている硬骨魚類の総鱗類に属する魚類で、約4億年前の古生代デボン紀に登場、7000万年前ごろの中生代白亜紀まで栄えていたが、その後は絶滅したとされていた。

ところが、1938年、南アフリカ沿岸でトロール中の漁船が引きあげた魚がシーラカンス類に属することがわかって生存が確認され、現存種は「ラティメリア」と名付けられた。これまでマダガスカル付近のコモロ諸島周辺などで200匹以上が捕らえられている。

マナド市の中央に位置し、交通の便がよい。敷地面積1ヘクタールを有し、まだ建設途中だが、マスタープラン通りに完成すると相当立派なものになるだろう。

ここで北スラウェシの4つの民族の文化の概要を知ることができる。

本物の『Waruga』や巨石『Watu Pinawetengan』のレプリカなどもあり、時間がない旅行者には北スラウェシの風俗や文化に触れるよい機会である。

建物のスペースに対して展示物の数が少ないことと、展示品の説明不足が今後の課題であろう。

特に明朝や清朝のものとされている壺や皿などの陶器に関しては怪しげな説明が多い。

(陶器に関してはインドネシア全国でも専門家が数人しかいないという)

展示品は5年に1回内容を交換する。

展示館に隣接する図書館には、ミナハサの歴史、ミナハサの民話、北スラウェシにおける独立戦争などに関する貴重な文献が多いので興味のある方は一度訪れることを勧める。

## 1. 概 要

名 称 : MUSEUM NEGERI PROPINSI SULAWESI UTARA

所在地 : Jl. W.R. Supratman No.72 Manado

TEL : (0431)862685

入館時間 : 月曜～木曜日 08:00 ～13:30

金曜日 08:00 ～11:00

土曜日 08:00 ～11:30

日曜日 通常は閉館だが、2日前に予約すると特別に開館してくれる。

入館料 : 大人 Rp.750- 子供 Rp.500-

(謝礼必要)

館員のガイドがついた場合、別にチップが必要。

## 2. 博物館設立の歴史

1967年、Minahasa県 Ratahan郡 Rasi 村の住民、Bola Lensun 氏が自宅の庭から出土した陶製の壺や皿を数点、教育文化省文化総局北スラウェシ地方局に持参した。同氏は、この出土品の調査と管理を同局に依頼した。これが北スラウェシ州国立博物館設立のきっかけである。以降、先祖の遺産の重要性を自覚した市民たちが各人所有していた物品を同局に寄付するようになった。

1974年には、集められた物品が相当数になり、専門の保管場所及び、一般市民に回覧させる場所の確保の必要にせまられた。

H. Sumuan文化総局北スラウェシ地方局長は、同年北スラウェシを訪問した、DR. Ida Bagus Mantora文化総局長に博物館設立の陳述をした。この要望は、1974/1975 年度の予算として認められた。

Jl. Ki Hajar Dewantara (現在のJl. W.R. Supratman) No.72 に博物館が建造された。

1974年当初は、敷地面積200m<sup>2</sup>、建物面積140m<sup>2</sup> という小さなものであった。

1991年1月9日付教育文化大臣決定書第001/I.0/1991号にて、北スラウェシ州国立博物館として認可された。

## 3. 展 示 物 (中庭)

### ①WARUGA (ワルガ) 《実物》

古代ミナハサ人の石棺。石をくり抜き、穴の中に遺体をしゃがむ格好で収めた。

石棺の上部には狩猟の様子、動物や植物などのモチーフなどが彫刻されている。

ワルガはミナハサの数箇所に現存しているが、Airmadidi のSawangan地区にあるものが一番まとまっており、教育文化省より『古代遺跡公園』に指定されている。

その起源は巨石時代に溯るとも言われるが不明である。古代は部族の有力者だけの墓であったが、14世紀頃からは民衆の間にも広まっていった。石棺の中には遺体の他に剣や装飾品なども入れられるようになった。18世紀初頭ミナハサ地方を襲った疫病により多数の死者が出てワルガの生産は衰え、キリスト教が伝導されるようになると完全になくなった。

②WATU PINAWETENGAN 〈レプリカ〉

Tompaso 郡にある巨石。長さ4m高さ2m。

古代ミナハサの7つの部族代表者が集まり、和戦に関する会合を開いた。

会合で決議された内容は石に刻まれた。この古代の文字は未だに解読されていない。

4. 展 示 物 (1階)

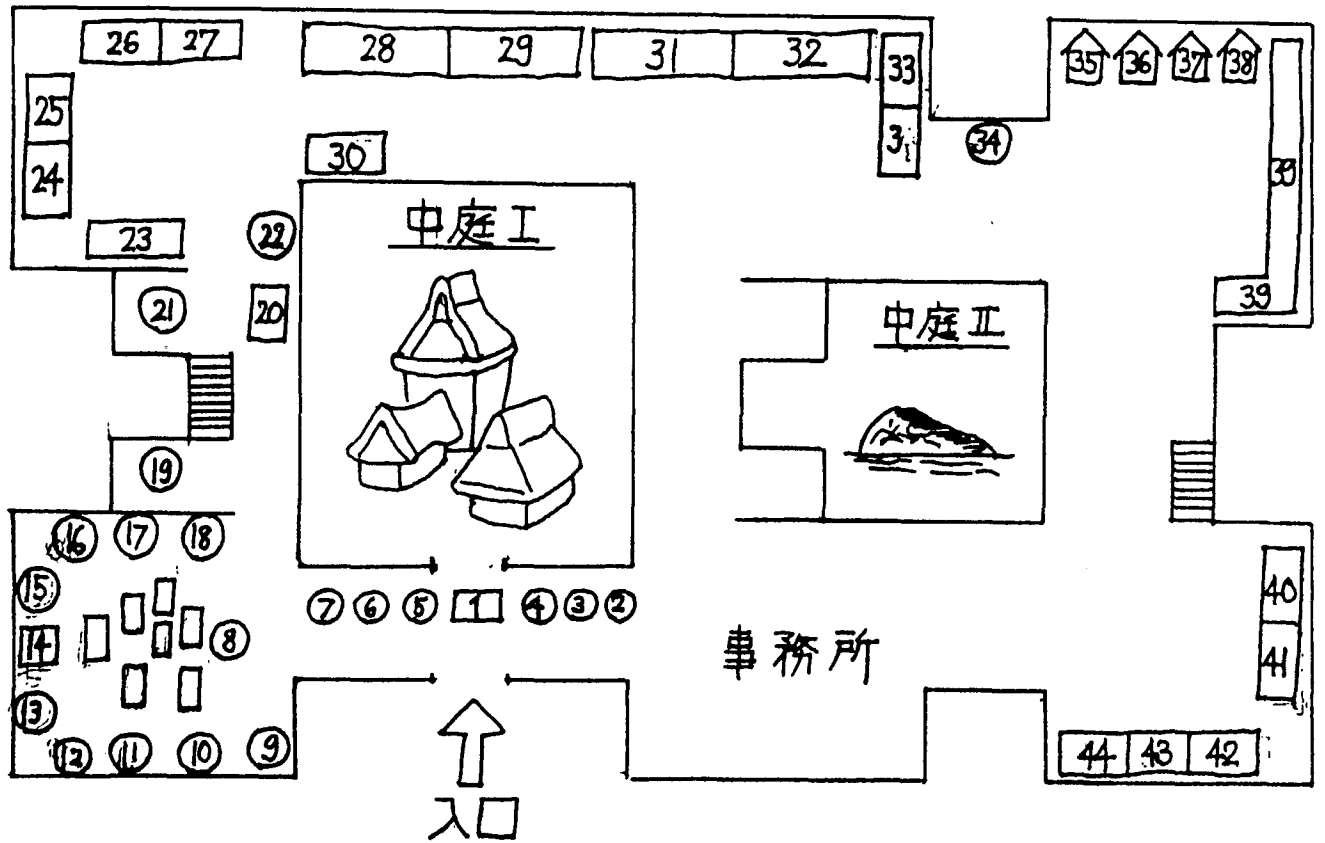
1. 北スラウェシ州国立博物館マスタープランの模型。
2. Lettu CTZ Piere Tendean (ピエレ・テンダアン中尉) の胸像
3. Letkol Charles Ch. Taulu (チャールズ・タウル中佐) の胸像
4. DR. G. S. S. J. Ratulangi (ラトウランギ博士) の胸像
5. Letkol A. G. Lembong (レンボン中佐) の胸像
6. Mayor Daan Mogot (ダアン・モゴット少佐) の胸像
7. Robert Wolter Mangisidi (ロバート・ウォルテル・マンギシディ) の胸像
  
8. 木琴。大小7つある。
9. ボラアン・モンゴウドウ県の紋章 ☆以下『ボラアン』と略す
10. グロンタロ市の紋章
11. グロンタロ県の紋章
12. サンギエ・タラウド県の紋章 ☆以下『サンギエ』と略す
13. 北スラウェシ州の紋章
14. 北スラウェシ州の地図
15. 教育文化省の紋章
16. ミナハサ県の紋章
17. マナド市の紋章
18. ビトゥン市の紋章
  
19. ブナケン海洋公園の海中模型。
20. BALONGSONG 【南ミナハサ】 墓の上に置く木箱。霊を守護するものと考えられていた。ワルガがミナハサ北部の風習であるのに対し、このバロンソンはミナハサ南部の風習である。木製なので年代ものは少なく、これはオランダにあったものを博物館用に逆輸入したものである。
21. LESUNG BATU 脱穀に用いる石臼。
22. WATU TUMOTOWA 【ミナハサ】 村の境界に置き、村の守り神とする石像。
  
23. KURE 粘土製の壺。外地で死んだ遺族の骨をこの壺に入れて故郷に持ち帰る。
24. ワルガからの出土品。腕輪、皿、刀などがワルガの中に収められていた。
25. 考古学的石。①サンゲエの Arangkaa 洞窟より出土した石。約 6,000年前のもの。  
②ミナハサの Passo村より出土した石。約 8,000年前のもの。  
1975年、Australian National University 考古学研究所 Peter Bellwood 教授の調査による。
26. NEKARA REDUPAN
27. TAPAHULA 【グロンタロ】 結婚式で新郎の両親から新婦の両親に渡す贈物。
  
28. 【グロンタロ】 結婚式で新郎新婦が座る椅子と装飾品。
29. 【グロンタロ】 新郎新婦の初夜の寝室。
30. 【グロンタロ】 伝統的な結婚衣装。
31. 【ミナハサ】 新郎新婦の初夜の寝室。
32. 【ミナハサ】 結婚式で新郎新婦が座る椅子と装飾品。
33. 【ミナハサ】 伝統的な結婚衣装。
  
34. 北スラウェシ各地方のハンドクラフトの帽子、籠、カバンなど。
35. BALOI 【ボラアン】 伝統的な家屋。
36. BELE PITULODULAHE 【グロンタロ】 伝統的な家屋。
37. BANLA 【サンゲエ】 伝統的な家屋。
38. WALE 【ミナハサ】 伝統的な家屋。
39. 各民族の代表的な漁具の実物と模型。①SASARAP 淡水魚用網②モリ③淡水魚用仕掛け④海用モリ⑤日笠⑥SERO GANTUNG海用仕掛け。陸地より1マイル沖。⑦TOLU日笠⑧餌箱⑨餌箱⑩網を縫う道具⑪投網⑫SERO TANAM海用仕掛け/海中10mに仕掛ける⑬EPUTO 淡水魚用仕掛け⑭収穫魚入れ。

- 40./41. インドネシア各地の代表的な織物。  
ジャワ、パレンパン、ランブン、バリ、東ティモールなど。
- 42. イリアン・ジャヤの女性が身につける腰蓑。
- 43. PAKAIAN KOFFO
- 44. 【中部スラウェシ】 KULAWI族が身に纏う木の皮で作った服。

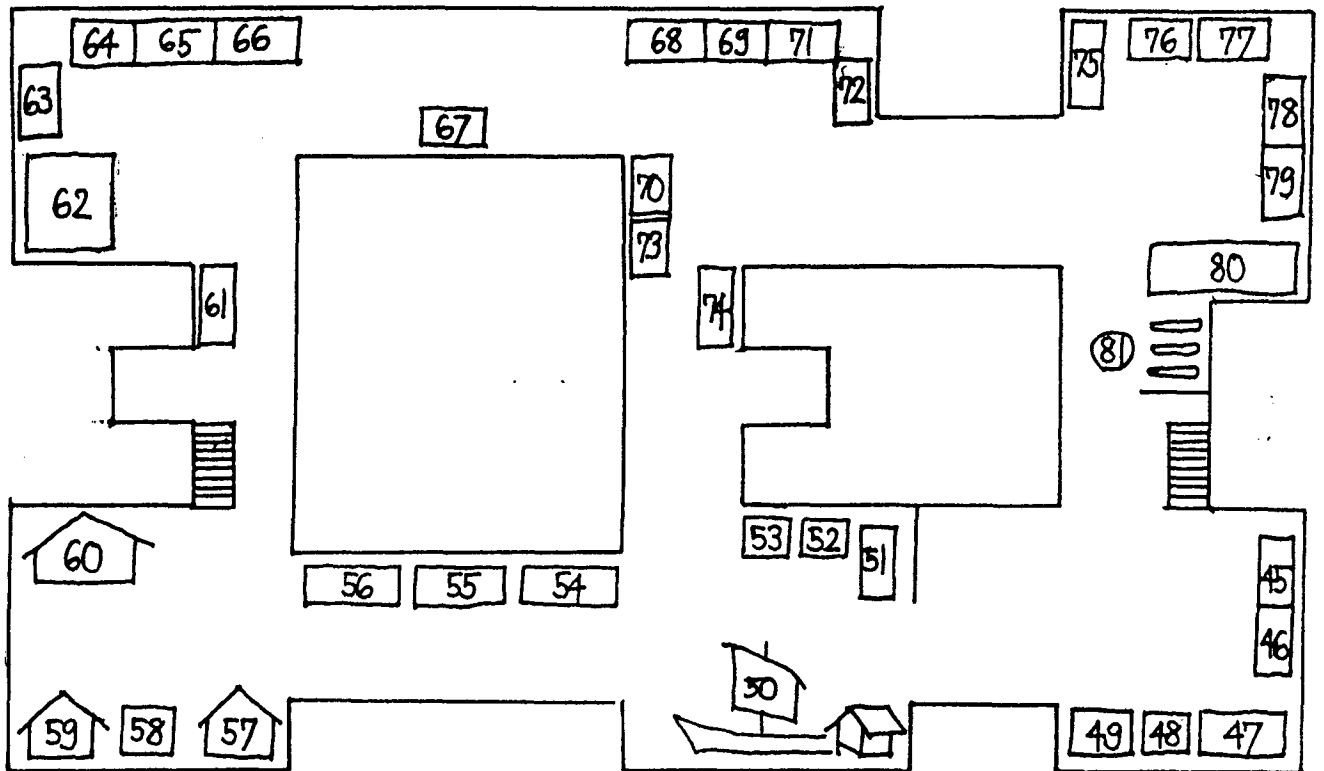
## 5. 展示物 (2階)

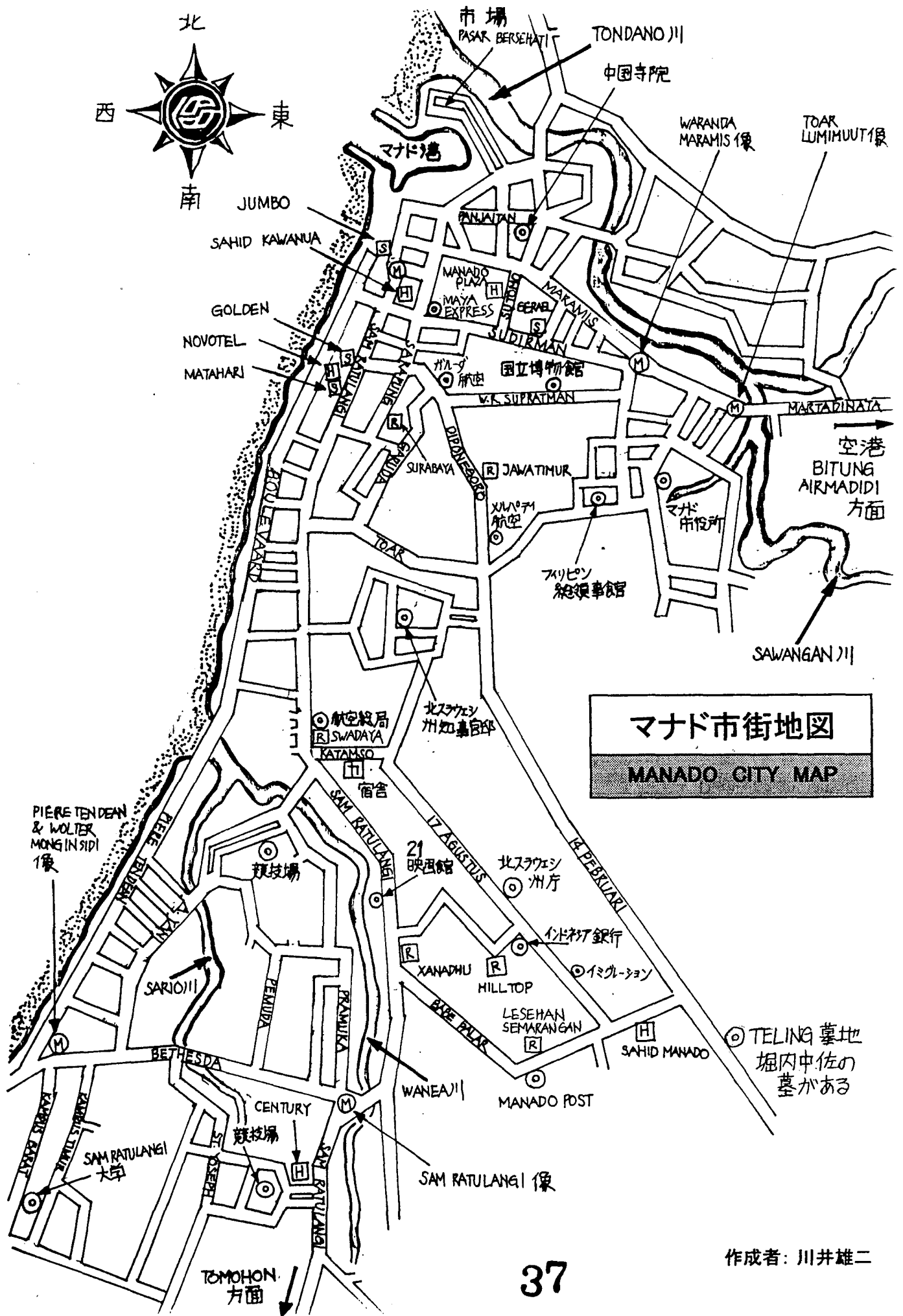
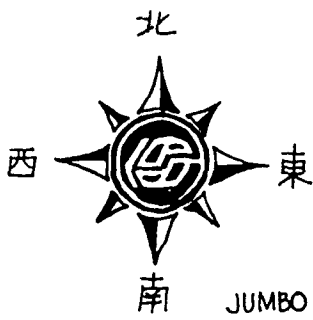
- 45. 1914年オスマン帝国のスルタンから Hendrik Massoko医師に対して贈られた表彰状。  
同氏が1914年の戦争において赤十字の医師として貢献したことに對するもの。
- 46. 初代大蔵大臣 DR. Alexander A. Maramis に対する3つの表彰状。  
①1956年2月17日付、西ドイツ政府からのもの。駐ドイツ大使としての貢献に對するもの。  
②1960年8月17日付、Piagam Tanda Kehormatan Bintang Mahaputra Tingkat III  
③1992年8月12日付、Piagam Tanda Kehormatan Bintang Republik Utama
- 47. ゴロンタロ地方の独立戦争の英雄 Nani Wartabone が使用していた椅子。
- 48. 女性運動組織『P I K A T』の創始者、Maria Walanda Maramis が使用していた机と椅子。
- 49. 1946年2月14日、マナドにおける独立戦争に関する会議で用いられたテーブルと椅子。  
マナド市内には、この日を記念した『JL. 14 FEBRUARI (2月14日通り)』がある。
- 50. PERAHU LONDE 【サンゲエ】 伝統的な漁師の船と漁師の家の模型。
- 51. PENDI オランダ時代の馬車(実物) 車輪が木製である。
- 52. RODA SAPI 牛車。
- 53. 荷車。
- 54. 【ミナハサ】 貝で作った楽器。儀式で使われた。
- 55. 【ミナハサ】 銅製のクラリネット。大小23個。結婚式や歓迎の儀式に用いた。
- 56. KABOSALAN 【ミナハサ】 歓迎の儀式に着用した戦いの衣装。  
①Burung Taon (嘴の根元にある刻みの数から年齢が分かることから年齢鳥と呼ばれている)の嘴と羽で作った帽子。②槍 ③剣 ④木の皮で作った衣服
- 57. 【ミナハサ】 伝統的な民家の台所の模型。
- 58. 椰子の実の白い果肉を擦り下ろす機械。動力は足漕ぎ式。
- 59. 刀や包丁の鍛冶場の模型。
- 60. グラ・ジャワ(黒砂糖)の製造場の模型。
- 61. 刀や兜。
- 62. オランダ風調度類。角卓+椅子4脚。丸卓+椅子6脚。ランプ2個。戸棚1つ。
- 63. KORA-KARA 【サンゲエ】 部族抗争時代の戦い用の船をモチーフにした木彫り。
- 64. KAWIRA 【サンゲエ】 結婚式の贈物を入れる箱。布製でビーズの装飾がある。
- 65. PENGINAAN 【ミナハサ/サンゲエ/ゴロンタロ】 結婚式で用いる食器の一種。
- 66. 椰子油を用いるランプ。
- 67. オランダ風調度類。卓+椅子2脚。卓の上にはドイツのハンバーグ製のベルがある。
- 68. 【サンゲエ】 結婚式で新郎新婦が座る椅子と装飾品。
- 69. 【サンゲエ】 新郎新婦の初夜の寝室。
- 70. 【サンゲエ】 伝統的な結婚衣装。
- 71. 【ボラアン】 新郎新婦の初夜の寝室。
- 72. 【ボラアン】 結婚式で新郎新婦が座る椅子と装飾品。
- 73. 【ボラアン】 伝統的な結婚衣装。
- 74. コインと紙幣のコレクション。日本軍政時代の紙幣もある。
- 75. 北スラウェシ各地の土器。
- 76. 中国、朝鮮、タイの茶碗や小皿。
- 77. ヨーロッパ風の食器類。
- 78./79. 中国(明朝/清朝)や日本の壺や大皿。
- 80. 壺。大4個。小5個。
- 81. ポルトガル/オランダ時代の大砲。

# 1階



# 2階



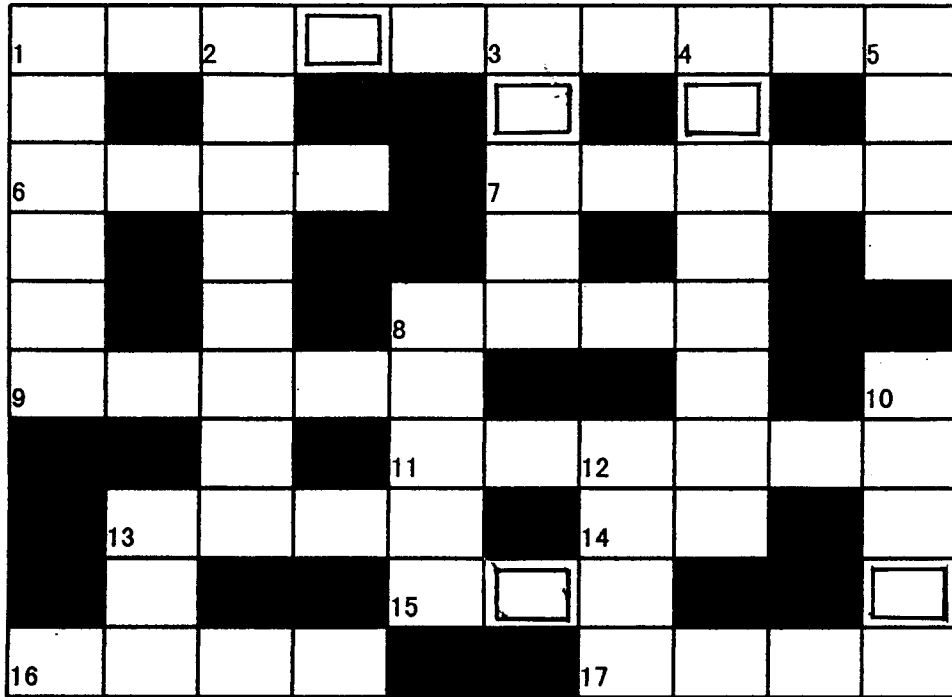


マナド市街地図  
MANADO CITY MAP

作成者: 川井雄二

# インドネシア語 クロスワード・パズル (2)

問題: 下のクロスワード・パズルを完成させた後、の文字を並べるとある動物名になります。それは何でしょうか。



--	--	--	--	--

出題：川井 雄二

MENURUN    タテのカギ	MENDATAR    ヨコのカギ
<p>1    ◎ <input type="text"/> Khusus Ibukota (DKI) = 首都特別地区                  ◎ <input type="text"/> Tingkat (DATI) II = 第II級地方自治体                  ◎ Bahasa <input type="text"/> = 地方語</p> <p>2    インドネシアには24の<input type="text"/>州<input type="text"/>と3の特別地区があり、それぞれ Gubernur (知事)がいる。</p> <p>3    舞 Nona minta dansa, dansa <input type="text"/> kali...                  ◎ seper<input type="text"/> jam = 15分</p> <p>4    スポーツ。運動。日本の『国体』にあたる                  ◎ Pekan <input type="text"/> Nasional (PON) = 全国運動週間 (大会の前後に1枚数千ルピアの協賛ステッカーをいたるところで強制的に買わされる)</p> <p>5    ◎ <input type="text"/> nyamuk = 蚊取り線香/殺虫剤  <input type="text"/> luar = 外用薬    peng<input type="text"/>an = 治療</p> <p>8    【英語と同じ綴り】会計検査。監査。</p> <p>10    思い出す。覚えている。記憶する。気がつく。                  ◎ Lupa-lupa <input type="text"/> = はっきり覚えていない。                  舞 Ku <input type="text"/>kan kepadamu akan janjimu padaku                  Hanya satu pintaku jangan kaulupakan daku</p> <p>12    <input type="text"/> Putih    <input type="text"/> Goreng    <input type="text"/> Campur  <input type="text"/> Kuning    <input type="text"/> Uduk    <input type="text"/> Tim                  (諺) Apa boleh buat. <input type="text"/> sudah jadi bubur.</p> <p>13    ① 通行証    ② ぴったり。ちょうど。                  ◎ Bayarlah dengan uang <input type="text"/> 構わないように払って下さい</p> <p>17    ② ひも。糸。帯。 <input type="text"/>an = 連盟。連合。同盟  <input type="text"/>an Dokter Indonesia    インドネシア医師会。</p>	<p>1    ◎ 人名。Pahlawan Nasional (国家英雄) の一人。ジャワ戦争(1825-30)における指導者。ハツ・カハ 3世の長男であったが、母の出身が低かったため弟が4世として即位した。通常、Pangeran (王子) <input type="text"/> と呼ばれる。                  ◎ 西部ジャワは Siliwangi 師団、東部ジャワは Brawijaya 師団。中部ジャワは <input type="text"/> 師団。</p> <p>6    Bagian tubuh binatang dsb yg paling belakang                  Dua <input type="text"/> 羽 ayam / Tiga <input type="text"/> 匹 kucing</p> <p>7    ◎ Menghindari makan dan minum dengan sengaja                  ◎ Bulan <input type="text"/> = 断食月    ◎ <input type="text"/> Senin-Kamis</p> <p>8    整理する。取り締まる。しきる。                  ◎ per<input type="text"/>an = 規則。法令。条例。</p> <p>9    オバケ。幽霊。悪霊。PocongやPontianak が有名                  Burung <input type="text"/> = 梟。Rumah <input type="text"/> = 幽霊屋敷。</p> <p>11    ~と共に(with) Ia pergi ~ <input type="text"/> ayahnya.                  で(by) Mitha datang <input type="text"/> kereta api.                  ~と(and) Sarah <input type="text"/> Siti akan datang besok.                  ◎ <input type="text"/> hormat 拝啓 ↔ Hormat kami 敬具</p> <p>13    舞 Anak manis jangan dicium, sayang kalau dicium merahlah <input type="text"/> 頬 nya.</p> <p>14    (略) アジア・アフリカ</p> <p>15    試験。テスト。</p> <p>16    養育する。教育する。世話する。看護する。                  Panti <input type="text"/>an = 孤児院    ◎ 書名『Salah <input type="text"/>an』</p> <p>17    ① 緋(か)り 織物。民族毎に独自の様式を持つ。</p>



クロスワード・パズル 前号の回答

B	A	N	D	U	N	G			H
A		E		D		O		H	I
W	A	R	N	A		R	I	A	U
A		A		N		E		T	
		K		G	A	N	J	I	L
U	P	A	H			G			O
S			I		S		K	A	S
A	D	A	T		M	A	U		M
H			A		A		D		E
A	G	A	M	A		D	A	U	N

— 編集後記 —

会報第1号は、時間的制約もあり必ずしも満足した出来ではなかったのですが、予想以上に好評をいただき編集部としても喜んでおります。ただ一部の会員の方には配布が遅れご迷惑をお掛けいたしました。第2号は創刊号の編集方式を基に、皆様からのご意見を参考にして作成いたしました。計画通り前号の3ヵ月後の10月に発行することができ—安心です。これからもこのペースで発行していきたいと考えています。

会員全員の原稿を掲載することを目標としておりますので、皆様の熱作をお待ちしております。

第3号は1999年1月頃発行を計画しています。

尚、ウジュン・パンダン総領事館からも引き続き各号に寄稿していただくよう依頼中です。当マナドを訪問された田口、金子両副領事に次号以降執筆していただく予定です。

また、会員の方から家族や友人知人に配布したいので数部余分に欲しいという要望も聞いております。事前に希望部数を連絡していただければ実費で増刷いたします。

1998年10月15日 日本人会会報編集部 編集部長：川口博康  
編集部員：川井雄二

# 会員名簿

会報「タルシウス」電子版では不特定多数の方が閲覧するため、セキュリティ上の観点より会員名簿は非公開とすることとしました。

(2014年04月20日)

上記理由により会員名簿が非公開になりましたことをご了承ください。

- 会報タルシウス（製本版）には従来通り名簿は掲載されます。
- 各会員に対しましての個別の、または、尋ね人などのお問い合わせは、

直接日本人会へお問い合わせください。

該当会員に連絡後、会員より直接連絡するか該当会員の同意のもとで、

連絡先をお知らせすることといたします。